

日中の専門高校における生徒の実践的な 教育に対する意識の比較研究

大國 博昭*・賈 俊業**

Hiroaki OGUNI, JIA Jun Ye

A Comparative Study of the Students' Consciousness toward Practical Education in Vocational High Schools in Japan and China

[キーワード：日本の専門高校教育，中国の職業教育，日中の職業教育，専門高校生の学習意識]

I はじめに

21世紀に向けて各国の重要な政策の一つは，青少年の健全な育成と科学・技術の発展であろう。産業のみならず科学や技術の発展は，優れた技術・技能者の養成に依拠するところが多である。

専門高校の役割は，生徒に産業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技能を習得させ，産業の意義や役割を理解させるとともに，その発展を図る能力と実践的な態度を身につけさせることに置いている。

本研究は，日本の専門高校と中国の中等専門学校における教育制度・教育課程，特に，普通科目と専門科目との単位割合，講義形式の授業と実験・実習等の経験的・体験的な授業への時間数の配当等について調査し，それらのデータを基に，職業教育の現状を比較・検討する。

また，現行の教育課程の下で教育を受けている生徒に対して，学習に対する意識及び卒業後の進路等についての志望調査を行い，結果の分析によって，その実態を明らかにすることを主たる目的とした。

II 調査の概要

学校の実態調査は，日本については，島根県立の専門高校3校を，中国については，北京市の中等専門学校3校を対象に選んで行なった。

生徒の学習に対する意識等についての調査では，それぞれの学校に在籍する，第3学年の生徒を対象に行なった。

日本の専門高校と中国の中等専門学校の位置づけについて簡単に説明しておく。

日本の専門高校は，高等学校教育課程に置かれ，職業に関する教科・科目の履修に重点をおいた，職業教育を主とする学科から成る学校として位置づけられている。

文部省では，職業教育の一層の活性化を図るため，平成6年4月から「活性化方策に関する調査研究会議」において検討を行なってきたが，7年3月に「スペシャリストへの道」と題する最終報告書を取りまとめた。

この報告書においては，専門高校の3年間の教育は卒業後の継続的な教育を視野に入れて，「将来のスペシャリスト」となるための基礎・基本の修得に重点を置く必要があるという考え方を示している。主な内容としては①従来の「職業高校」という呼称を「専門高校」と改めること，②専門高校から大学等へ進学する方策の充実等が盛り込まれている。

中国の中等専門学校の位置づけについては，図1の学校系図と，次に述べた，中国の全般的な教育現状の概要によって示しておく。

中国の全般的な教育現状の概要

中国は中華人民共和国建国後，教育について基本となる法律が制定されていなかった。しかし，改革・開放後，教育法規の制定が重視され，80年に建国以来初の教育関係法である「学位条例」が公布されている。その後86年に「義務教育法」，94年に「教師法」が施行された。

そして，1995年には教育全体に関わる総合的な法律である「中華人民共和国教育法」が施行された。この「教

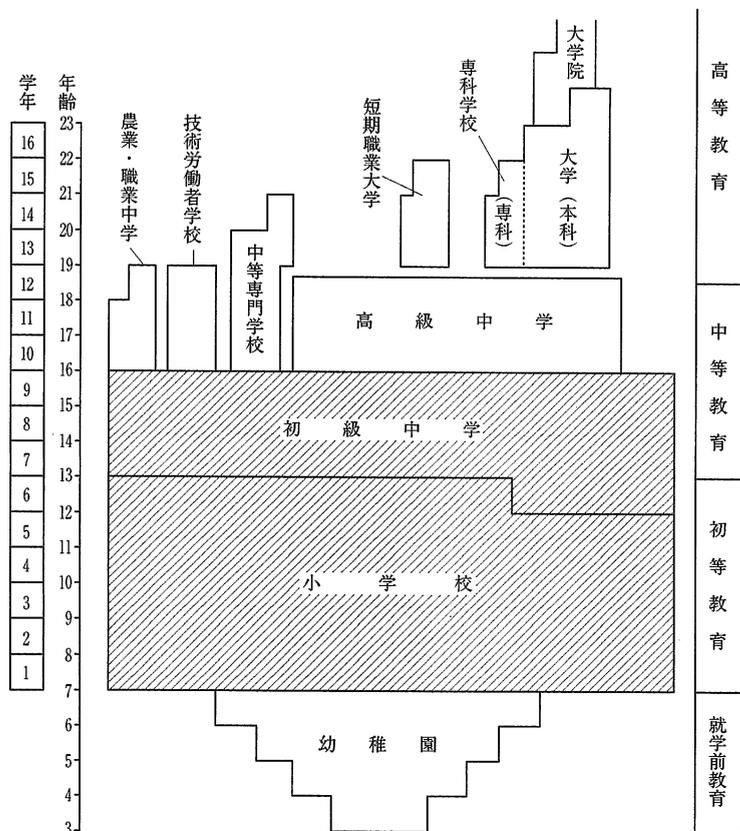


図1. 中国の学校系統図

育法」は、総則、教育基本制度、教育を受ける者等全10章、84条から構成され、中国の教育についての基本方針が示されており、また、教育を受ける者の権利が保障される、ということからも注目されている。

また、「教育法」の制定に伴い「職業教育法」等の関連法規が急ピッチで整備されている。

法律に依拠した教育行政のおかげで、職業技術教育も充実してきている。経済建設にあわせて中等専門学校、技能労働者学校、職業高校など高校レベルの職業技術教育の充実をすすめている。体制改革のもとでは、①普通高校を職業高校に改組する、②企業・事業体による職業高校経営を奨励する、③既存の職業高校の潜在力を発揮させるなどの措置がある。

中国では、中等段階の職業技術教育を行なう学校として、中等専門学校、技術労働者学校、農業・職業高級中学がある。

(1) 中等専門学校は、「中級の専門人材を養成する」学校で、修業年限は一般に4年、専攻により3年または5年のところもある。専攻分野には、工業、農業、林業、

医学、財政・経済、政治法律、体育、芸術などがある。幼稚園教員や小学校教員を養成する中等師範学校も中等専門学校の一つである。教育課程は、①政治、②一般教科、③専門基礎、④専門に分かれ、前三者が授業時数全体の約75%を占める。

(2) 技術労働者学校は、「中級の技術労働者を養成する」学校で、修業年限は3年で、教育課程には、一般教科や専門の基礎理論も含まれるが、技能訓練に重きが置かれている。

(3) 農業・職業高級中学は、「普通教育と職業技術教育を結びつけた教育を行なう」とされ、修業年限は3年で、中等専門学校や技術労働者学校に比べて専門教育の比率が小さい。教育課程では、普通教育と専門教科との比率を、工業系では4：6、文科系では5：5としている。

中等専門学校と技術労働者学校の卒業生が、一部の例外を除いて直接大学に進学できない(卒業後2年以上の就業後には可能)のに対し、農業・職業高級中学の卒業生は、直接大学に進学できる。

高級中学段階の在学者のうち、普通教育学校(普通高校)の在学者は55%、職業技術教育学校の在学者は45%となっている(1989年)。

1. 調査対象

調査対象に選んだ、島根県立の3つの専門高校と北京市の3つの職業学校・学科(専業)及び生徒数等以下に示したとおりである。

対象に選ばれた学科(専業)は、島根県立と北京市のそれぞれ3つの専門高校と職業学校に置かれている各学科(専業)の中で、比較的共通性をもっていることによるものである。

◆島根県立の工業高等学校	◆北京市の農業機械化学校
機械科	農業機械化専業
76名	40(9)名
電気科	機電設備維修専業
58(1)名	38名
土木科	農業機械製造専業
29(2)	32(4)名

◆島根県立の商業高等学校	◆北京市の財經学校
商業科	工商金融專業
179 (117) 名	36 (8) 名
情報処理科	經濟信息管理專業
27 (14) 名	33 (12) 名
会計科	會計專業
25 (16) 名	78 (62) 名
◆島根県立の農林高等学校	◆北京市の農業学校
農業科	牧畜獸医專業
33 (10) 名	35名
園芸科	園芸專業
32 (27) 名	79 (64) 名
農業土木科	村・町建設專業
27名	30 (5) 名

() 内の数字は各学科(各專業)の女子生徒の内数を示す。

2. 調査内容与方法

学校の実態調査は、①設置学科、②在籍生徒数、③各学科の課程、④授業の年間計画、⑤各学年のカリキュラム、⑥普通科目と専門科目との時間割合、⑦理論的な授業と実践的な授業との時間割合、⑧在学中に取得できる資格などに関する事項について、各学校の関係者からの聞き取り及び資料によって行なった。

生徒を対象とした意識調査では、この学校・学科を選んだ理由、学校・学科を選んだことの良否、卒業後に学科で学んだことに関連する職業に就きたいか、学校内・外での実験・実習（または演習）、卒業後の進路など26項目（30の小項目）について、質問紙形式によって行なった。

3. 実施時期

平成8年10月から平成9年2月までとした。

III 調査対象校の実態

実態調査の結果について以下に示す。

3-1 島根県の3高校

1. 島根県立の工業高等学校

① 設置課程・学科

全日制：機械科 電気科 電子科 情報技術科
電子機械科 建築科 土木科 工業化学科

② 在籍生徒数

全日制：963人

③ 授業時数、カリキュラムなど

全日制：生徒の週当たりの時数合計は32時間、ホームルーム1時間、クラブ活動1時間、3年間で90単位（単位については、1単位時間を50分とし、35単位時間の授業を1単位として計算するものとする）。そのうち、普通科目49～55単位、専門科目35～41単位。

実践的な学習：学外現場実習、課題研究。

専門科目のうち理論的な授業と実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業との時間割合は約8.5：1.5になっている。

④ 在学中に取得可能あるいは取得できそうな資格等 二級ボイラー技師 ガス溶接技術者 乙種危険物取扱者 第2種電気工事士 第3種電気主任技術者 デジタル技術検定（2～4級）アマチュア無線技師 工事担当者（アナログ第3種）情報処理技術検定（1～3級）システムアドミニストレータ 測量士補 土木施工技術者 公害防止管理者

2. 島根県立の商業高等学校

① 設置課程・学科

全日制：商業科 情報処理科 会計科 国際経済科

② 在籍生徒数：928人

③ 授業時数、カリキュラムなど

生徒の週当たりの時数合計は32時間、ホームルーム1時間、クラブ活動1時間、3年間で90～91単位。そのうち、普通科目59～61単位、専門科目30～32単位。

実践的な学習：総合実践、課題研究。

専門科目のうち理論的な授業と実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業との時間割合は約8.7：1.3になっている。

④ 在学中に取得可能あるいは取得できそうな資格等 簿記（1～3級） 実用英語（1～3級） ワープロ（1～3級） 情報処理（1～3級） 電卓実務（電卓・コンピュータ利用技術1～3級） 電卓（1級～段位） 珠算（1～3級） 販売士（1～3級） 商業経済（1～3級） 漢字（1～3級）

3 島根県立の農林高等学校

① 設置課程・学科

全日制：農業科 園芸科 農林土木科 園芸土木科
食品製造科

② 在籍生徒数：552人

③ 授業時数、カリキュラムなど

生徒の週あたりの時数合計は33時間、ホームルーム1時間、クラブ活動1時間、3年間で87~93単位。そのうち、普通科目49~62単位、専門科目31~44単位。

実践的な学習：総合実習、課題研究。

専門科目のうち理論的な授業と実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業との時間割合は約8.2:1.8になっている。

- ④ 在学中に取得可能あるいは取得できそうな資格等
危険物取扱者資格(丙, 乙種) 毒物劇物取扱者(農業用, 一般用) 2級ボイラー技師 ワークプロ検定
情報処理技術検定 測量士補・測量士 土木施工技術者試験 造園技術検定1種 造園施工技術者試験

3-2 北京市の学校

1. 北京市農業機械化学校

- ① 設置年代：1960年に設置された。いろいろな理由によって、学校は2度閉校されていて、1981年に正式に設置された。北京市農業機械局に直属している。
- ② 設置学科〔注；（ ）内は日本語対応〕
四年制：計算機及び応用専業 企業管理専業 農業機械化専業 農業機械製造専業 财会専業(財務会計学科) 機電設備維修専業(機械・電気設備の補修科) 車・トラクター運用・維修専業
三年制：财会専業 機電設備維修専業 文秘及びとう案(経歴書管理)専業 車・トラクター運用・維修専業
- ③ 在籍生徒数：975人
- ④ 授業時数, カリキュラムなど

四年制：4年間の総計は202週である。その内訳の大枠は次のようである。入学教育が2週、試験が7週、機動性の時間(前・後期の間の補習)が3.5週、冬・夏休みが34週、卒業教育が1週間になっている。

割り当てられている授業時数を形態別にみると、いわゆる理論的な授業に112.5週を、学校内外での実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業に42週を当てている。

理論的な授業と実践的な授業との時間割合は約7.3対2.7になっている。

授業の週あたりの時数は28~30単位時間で、4年間の総授業時数は約3,215時間である。

授業内容からみると、基礎科目が1,314時間で約41%、専門科目が1,901時間で約59%(その

うち、専門基礎科目に814時間の約43%、専門科目に879時間の約46%、選択科目に208時間の約11%)の割合で構成されている。

実践的な学習：教学実習(校内外での現場見学)、生産実習、生産労働、労働課(校内外での奉仕的な作業)、課程設計(設計演習)、卒業実習、卒業設計。

三年制：3年間の総計は150週である。その内訳の大枠は次のようである。入学教育が2週、試験が6週、機動性の時間が5週、冬・夏休みが24週、卒業教育が1週間になっている。

割り当てられている授業時数を形態別にみると、いわゆる理論的な授業に94週を、学校内外での実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業に20週を当てている。理論的な授業と実践的な授業との時間割合はおよそ8.7対1.8になっている。

授業の週あたりの時数は28~30単位時間で、3年間の総授業時数は約2,726時間である。

授業内容からみると、基礎科目が1,361時間で約50%、専門科目が1,365時間で約50%(そのうち、専門基礎科目に500時間の約37%、専門科目に865時間の約63%)の割合で構成されている。

実践的な学習：教学実習、生産実習、生産労働、労働課、課程設計、卒業実習、卒業設計。

- ④ 在学中に取得可能あるいは取得できそうな資格等
珠算の普通3級 家庭常用電気の維修証 五筆字型漢字輸入 車・トラクターの維修及び使用証 農業機械維修 速記 運転免許 英文打字

2. 北京市財經学校

- ① 設置年代：元は普通高級中学(普通高校)だった。1980年に職業高級中学(専門高校)になった。直接的には、北京市の東城区教育局が管轄している。

- ② 設置学科〔注；（ ）内は日本語対応〕
四年制：計算機管理専業(コンピューター管理科) 經濟信息管理専業(經濟情報管理科) 涉外財經専業(海外貿易・財政經濟科) 財經・金融専業 金融・証券専業 工商金融専業
三年制：会計専業 計算機応用専業

- ③ 在籍生徒数：906人

- ④ 授業時数, カリキュラムなど

四年制：4年間の総計は196週である。その内訳の大枠は次のようである。入学教育が1週、復習試験が16週、機動性の時間が6週、冬・夏休みが37週、

卒業教育が1週間になっている。

割り当てられている授業時数を形態別にみても、いわゆる理論的な授業に105週を、学校内外での実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業に30週を当てている。

理論的な授業と実践的な授業との時間割合はおよそ7.8対2.2になっている。

授業の週あたりの時数は29～30単位時間で、4年間の総授業時数は約3,485時間である。

授業内容からみても、基礎科目が1,564時間で約45%、専門科目が1,921時間で約55%(そのうち、専門課程に1,326時間の約69%、選修科目に323時間の約17%、技能科目に272時間の約14%)の割合で構成されている。

実践的な学習：教学実習、労働課、見習い実習、模擬実習、専門総合実習、卒業総合実習、卒業設計。
三年制：3年間の総計は145週である。その内訳の大枠は次のようである。入学教育が1週、復習試験が12週、機動性の時間が6週、冬・夏休みが26週、卒業教育が1週間になっている。

割り当てられている授業時数を形態別にみても、いわゆる理論的な授業に73週を、学校内外での実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業に26週を当てている。理論的な授業と実践的な授業との時間割合はおよそ7.4対2.6になっている。

授業の週あたりの時数は29～30単位時間で、3年間の総授業時数は約2,482時間である。

授業内容からみても、基礎科目が1,088時間で約44%、専門科目が1,394時間で約56%の割合で構成されている。

実践的な学習：教学実習、労働課、見習い実習、模擬実習、専門総合実習、卒業総合実習、卒業設計。
実践的な学習での内容と時数は、三年制と四年制で共通になっていて、見習い実習では見学・調査に約1週間を当てている。模擬実習では、実習での訓練を通して、生徒の専門的な総合技能を育成することを目的に約2週間行なっている。また、卒業総合実習では、専門的で実践的な実習に約10週間を当てている。

- ④ 在学中に取得可能ないは取得できそうな資格等
珠算技能 計算機数掘録入(数字入力検定) 硬筆書法 点札技能英文打字(札勘技能英文打字) 漢字録(漢字入力検定)

- ① 設置年代：1958年に設置され、北京市農林局に直属している。ただ一つの北京市の総合型の農業中等専門学校で、国家クラスの重点中等専門学校である。

1994年に、東京都立農芸学校と友好関係を結んだ。

- ② 設置学科〔注；()内は日本語対応〕

四年制：園芸専業 牧畜獣医専業 村・町建設専業 工業及び民用建築専業(建築科) 計算機及び応用専業 物業管理専業(物産業管理科) 果物・野菜貯蔵加工専業 果樹・野菜専業〔果品生産・加工組、果林組、野菜組〕農村经济管理専業〔農業経済組、郷・町企業管理組、会計・審計組 農村金融組、外経・外貿組〕地籍測量・土地管理専業 公路・橋梁工程専業

三年制：果樹・野菜専業〔野菜組、果林組〕文秘・とう案専業〔文秘・とう案組、事務の自動化組〕農村经济管理専業 料理屋・旅館管理専業 牧畜獣医専業 車・トラクター運用・維修専業

- ③ 在籍生徒数：3,060人

- ④ 授業時数、カリキュラムなど

四年制：4年間の総計は192週である。その内訳の大枠は次のようである。入学教育が1週、復習試験が16週、機動性の時間が4週、冬・夏休みが36週、卒業教育が1週間になっている。

割り当てられている授業時数を形態別にみても、いわゆる理論的な授業に96週を、学校内外での実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業に38週を当てている。理論的な授業と実践的な授業との時間割合はおよそ7.2対2.8になっている。

授業の週あたりの時数は25～28単位時間で、4年間の総授業時数は約3,120時間である。

授業内容からみても、基礎科目が1,404時間で約45%、専門科目が1,716時間で約55%の割合で構成されている。

実践的な学習：教学実習、労働課、生産実習、専門実習、卒業実習、卒業設計。

三年制：3年間の総計は150週である。その内訳の大枠は次のようである。入学教育が1週、復習試験が12週、機動性の時間が6週、冬・夏休みが26週、卒業教育が1週間になっている。

割り当てられている授業時数を形態別にみても、いわゆる理論的な授業に74週を、学校内外での実験・実習・演習等をも含めた実践的な授業に30週を当てている。理論的な授業と実践的な授

3. 北京市農業学校

業との時間割合はおよそ7.1対2.9になっている。

授業の週あたりの時数は23～28単位時間で、3年間の総授業時数は約2,020時間である。

授業内容からみてみると、基礎科目が888時間で約44%、専門科目が1,132時間で約56%の割合で構成されている。

実践的な学習：教学実習、労働課、生産実習、専門実習、卒業実習、卒業設計。

- ④ 在学中に取得可能あるいは取得できそうな資格等
園芸証 会計証 獣医証

以上、調査対象校の実態調査の結果から、日本の専門高校と中国の職業学校での、総単位数(授業時数)、普通科目及び実践的な学習について、まとめてみると次のようになる。

日本の場合：3年間の単位数は87～93単位(3,045～3,255単位時間)。このうち、普通科目が49～61単位の約55%～68%、専門科目が30～44単位で約33～49%になっていた。

また、総合実習(実践)、課題研究などの経験的・実践的な学習は、総単位数の約6%～16%を占めていた。

中国の場合：3年間の授業時間数は約2,970～3,300単位時間、4年間の授業時間数は約4,170～4,400単位時間。このうち、基礎(普通)科目が約41%～50%、専門科目が約50%～60%になっていた。

また、教学実習、生産実習、労働教育、課程設計、総合実習、卒業実習、卒業研究(設計)などの経験的・実践的な学習は、総時間数の約19%～28%を占めていた。

中国の中等专业学校では、物理・化学・歴史・地理などのような、いわゆる基礎科目は一部の専門学校と一部の専攻でしか開講していないこともあって、日本の専門高校に比べて専門科目の授業時間数が総時間数の半分以上を占めていた。

ところで、教育課程審議会は、「教育課程の基準の改善について」の「審議のまとめ」を、平成10年6月22日に公表し、7月29日に答申をした。

文部省では、この答申を受け、学習指導要領の改訂を終え、高等学校については、平成10年度中に告示し、平成15年度から学年進行により実施する予定である。

完全学校週五日制の下、授業時数の縮減により、高等学校の卒業に必要な修得総単位数は、現行の80単位を74単位に縮減する。そのため、共通に学ぶ必修科目の合計単位数は現行の38単位(普通科)を31単位に縮減する。

一方、理科教育及び産業教育審議会は、教育課程審議

会が提出した最終答申より前の7月23日に、「今後の専門高校における教育の在り方等について」の答申を文部大臣に提出した。

それによれば、《教育課程の基準の改善》について、専門教育に関する必修単位を30単位から25単位に削減する。現在、各学科に2から6科目ある、原則履修科目を各学科共通2科目に削減するとしている。

ところで、専門高校卒業生の大学進学希望は年々増加の傾向にある。このたびの《教育課程の基準の改善》に当っては、これを考慮して、専門科目の必修単位数を削減して、カリキュラムの弾力化が進められたと言われて

いる。またいっぽうで、今後の産業構造・就業構造の変化、科学技術の高度化、情報化等は著しく進むと言われて

いる。こうして社会の変化や産業の動向等への適切な対応を視野において、専門性の基礎・基本を重視しながら、経験的・実践的な教育の充実・発展を目指した職業教育の改善が求められる。

IV 生徒を対象にした意識調査の結果の分析と考察

生徒に対して行なった意識調査での質問項目の概要を示しておく。

「進学した高校(学校)、学科(専攻)を選んだ動機」、「卒業後の職業と学科(専攻)で学んだ専門との関連」、「進学後の満足度」、「学校内での実験・実習(または演習)等」、「産業現場実習及び企業・現場見学等」、「普通科目や専門科目での講義形式の授業時数及び実験・実習等の授業時数」、「取得した資格」、「卒業後の進学の意志」、「希望する就職先」等についてである。

以下に、各質問内容と回答の結果を示す。

4-1 進学した高校(学校)を選んだ動機

表I(1～4)及び表I(5～8)に示す。

島根県立の各高校及び学科について、高校選択の理由の度数(順位)が異なるか否かをカイ自乗によって有意差検定を行なった。

県立工業高校については、 $\chi^2=45.586 > \chi^2_{0.01}(14)=29.141$ となり、1%水準で有意だった。すなわち、学科によって選択された理由項目の順位は異なるといえる。

これを学科ごとに、1位の理由でみてみると、機械科では「なんとなく」によるものが28%、電気科では「専門的な知識・技能を身につけたかった」が33%、土木科では「自分が進みたい学科があったから」が24%となっ

表 I (1~4)

質問項目 I-1 この高校(学校)を選んだ理由として、どのようなことが考えられましたか。

- a 自分が進みたい学科(専業)があった
- b 将来希望している職業に関連があった
- c 先生や周りの人にすすめられた
- d 高校卒業後に、早く実社会に出たかった
- e 専門的な知識・技能を身につけたかった
- f 資格を取得したかった
- g なんとなく
- h その他()

に対する回答の結果

表 I-1 島根県立の工業高等学校

項目 学科	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
機械科	5	16	6	4	9	1	21	14	76
電気科	2	5	8	11	19	3	9	1	58
土木科	7	3	6	2	3	1	4	3	29
合計	14	24	20	17	31	5	34	18	163
%	8.6	14.7	12.3	10.4	19.0	3.1	20.9	11.0	100

表 I-2 島根県立の商業高等学校

項目 学科	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
商業科	5	21	20	38	24	26	30	15	179
情報科	3	4	2	6	5	3	3	1	27
会計科	2	4	1	1	5	2	7	3	25
合計	10	29	23	45	34	31	40	19	231
%	4.3	12.6	10.0	19.5	14.7	13.4	17.3	8.2	100

表 I-3 島根県立の農林高等学校

項目 学科	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
農業科	5	1	10	1	8	0	5	3	33
園芸科	4	2	4	0	3	0	15	4	32
農土科	2	3	3	1	5	2	11	0	27
合計	11	6	17	2	16	2	31	7	92
%	12.0	6.5	18.5	2.2	17.4	2.2	33.7	7.6	100

ていて、学科によって高校選択への目的意識に差異がみられた。

工業高校全体では、表 I-4 に示したように、「なんとなく」が20.9%、次いで「専門的な知識・技能を身につけたかった」が19.0%、「将来希望している職業に関連があった」(14.7%)の順となっている。

県立商業高校については、 $\chi^2=15.014 < \chi^2_{0.05}(14)=23.685$ となり、5%水準で有意とならなかった。すなわち、高校選択の理由が学科によって異なっているといえ

表 I-4 島根県立の各学校を選んだ理由としての上位3位の状況

学校 順位	工業	商業	農林
第一位	なんとなく	高校卒業後早く実社会に出たかった	なんとなく
%	20.9	19.5	33.7
第二位	専門的な知識・技能を身につけたかった	なんとなく	先生や周りの人にすすめられたから
%	19.0	17.3	18.5
第三位	将来希望している職業に関連があった	専門的な知識・技能を身につけたかった	専門的な知識・技能を身につけたかった
%	14.7	14.7	17.4

ない。統計的には有意でないが、商業高校全体では、上位の理由が「高校卒業後に、早く実社会に出たかった」(19.5%)、「なんとなく」(17.3%)、「専門的な知識・技能を身につけたかった」(14.7%)などとなっている。

県立農業高校についても、 $\chi^2=22.735$ となり、5%水準で有意とならなかった。農業高校全体では、上位の理由が「なんとなく」(33.7%)、「先生や周りの人にすすめられた」(18.5%)、「専門的な知識・技能を身につけたかった」(17.4%)などとなっている。

島根県立の高校全体については $\chi^2=43.493 > \chi^2_{0.01}(14)=29.141$ となり、1%水準で有意であった。

すなわち、学校によって選択された理由項目の順位は異なるといえる。これを学校ごとに(表 I-4)、1位の理由を見てみると、工業高校では「なんとなく」(20.9%)、商業高校では「高校卒業後に早く実社会に出たかった」(19.5%)、農林高校では「なんとなく」(33.7%)などとなっていて、学校によって高校選択への目的意識に差異がみられた。

各高校において、共通して高校選択の理由の度数(順位)が高かったものに、「専門的な知識・技能を身につけたかった」、「高校卒業後に、早く実社会に出たかった」、「先生や周りの人にすすめられた」、「将来希望している職業に関連があった」などが挙げられているのは、専門高校で学ぶ生徒の、ある意味での本音として受けとめられよう。ただ、理由に「なんとなく」とあるのも見逃せない。

高校入試制度等の改善や中学校における進路指導の改善・充実及び中学校と専門高校との連絡協議体制の整備などへの積極的な取り組みも、すでに多くの学校において行なわれてきているが、簡単には解決のできない、今日の社会的・教育的な課題であり、真剣に取り組む必要がある。

北京市の各学校及び専業についても、島根県立の各高

表 I (5~8)

質問項目 I-1 この高校(学校)を選んだ理由として、どのようなことが考えられましたか。

- a 自分が進みたい学科(専攻)があった
- b 将来希望している職業に関連があった
- c 先生や周りの人にすすめられた
- d 高校卒業後に、早く実社会に出たかった
- e 専門的な知識・技能を身につけたかった
- f 資格を取得したかった
- g なんとなく
- h その他()

に対する回答の結果

表 I-5 北京市農業機械化学校

項目 専攻	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
A専攻	1	4	9	8	6	1	6	5	40
B専攻	2	9	7	6	5	3	5	1	38
C専攻	1	2	8	7	3	1	6	4	32
合計	4	15	24	21	14	5	17	10	110
%	3.6	13.6	21.8	19.1	12.7	4.5	15.5	9.1	100

A: 農業機械化 B: 機電設備維修 C: 農業機械製造

表 I-6 北京市財経学校

項目 専攻	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
A専攻	3	7	5	6	4	3	5	3	36
B専攻	5	6	3	6	6	3	3	1	33
C専攻	12	19	7	13	11	6	7	3	78
合計	20	32	15	25	21	12	15	7	147
%	13.6	21.8	10.2	17.0	14.3	8.2	10.2	4.8	100

A: 工商金融 B: 経済信息管理 C: 会計

表 I-7 北京市農業学校

項目 専攻	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
A専攻	1	4	3	6	9	5	4	3	35
B専攻	22	16	5	13	9	1	9	4	79
C専攻	2	7	3	3	2	2	8	3	30
合計	25	27	11	22	20	8	21	10	144
%	17.4	18.8	7.6	15.3	13.9	5.6	14.6	6.9	100

A: 牧畜獣医 B: 園芸 C: 村・町建設

校と同じように、学校選択の理由の度数(順位)が異なるか否かをカイ自乗によって有意差検定を行なった。

北京市機械化学校については、 $\chi^2=10.568 < \chi^2_{0.05}(14)=23.685$ となり、5%水準で有意とならなかった。機械化学校全体では、表 I-8 に示したように、上位の理由が「先生や周りの人にすすめられた」(21.8%)、「学校卒業後に、早く実社会に出たかった」(19.1%)、

表 I-8 北京市の各学校を選んだ理由としての上位3位の状況

学校 順位	機械化	財経	農業
第一位	先生や周りの人にすすめられたから	将来希望している職業に関連があった	将来希望している職業に関連があった
%	21.8	21.8	18.8
第二位	高校卒業後早く実社会に出たかった	高校卒業後早く実社会に出たかった	自分が進みたい専攻があった
%	19.1	17.0	17.4
第三位	なんとなく	専門的な知識・技能を身につけたかった	高校卒業後早く実社会に出たかった
%	15.5	14.3	15.3

「なんとなく」(15.5%) などとなっている。

財経学校についても、 $\chi^2=4.777$ となり、5%水準で有意とならなかった。財経学校全体では、上位の理由が「将来希望している職業に関連があったから」(21.8%)、「学校卒業後に、早く実社会に出たかった」(17.0%)、「専門的な知識・技能を身につけたかった」(14.3%) などとなっている。

農業学校については、 $\chi^2=31.012 < \chi^2_{0.01}(14)=29.141$ となり、1%水準で有意であった。すなわち、専攻によって選択された理由項目の順位は異なるといえる。これを専攻ごとに、1位の理由でみると、牧畜獣医専攻では「専門的な知識・技能を身につけたかった」(25.7%)、園芸専攻では「自分が進みたい学科があった」(27.8%)、村・町建設専攻では「なんとなく」(26.7%) ととなっていて、専攻によって学校選択への目的意識に差異がみられた。

農業学校全体では、1位の理由が「将来希望している職業に関連があった」(18.8%)、2位が「自分が進みたい専攻があった」(17.4%)、3位が「学校卒業後に、早く実社会に出たかった」(15.3%) の順になっている。

北京市の学校全体については、 $\chi^2=23.738 < \chi^2_{0.05}(14)=23.685$ となり、5%水準で有意であった。すなわち、学校選択の理由の度数(順位)が学校によって異なるといえる。これを学校ごとに、1位の理由でみると、機械化学校では「先生や周りの人にすすめられた」(21.8%)、財経学校及び農業学校では「将来希望している職業に関連があったから」(21.8%、18.8%)などが挙げられている。

4-2 この学科(専攻)を選んだ動機

表 II (1~4) 及び表 II (5~8) に示す。

進学した高校(学校)を選んだ動機についての場合と

表II (1~4)

質問項目 I-2 この学科(専業)を選んだ理由として、どのようなことが考えられましたか。

- a 好きな授業科目があるから
- b 得意な授業科目があるから
- c 将来希望している職業に関連があったから
- d 先生や周りの人にすすめられたから
- e なんにも知らずに
- f なんとなく
- g 資格を取得したかった
- h その他 ()

に対する回答の結果

表II-1 島根県立の工業高等学校

項目 学科	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
機械科	5	1	22	9	0	24	7	8	76
電気科	1	0	11	19	2	13	8	4	58
土木科	3	1	8	9	0	3	2	3	29
合計	9	2	41	37	2	40	17	15	163
%	5.5	1.2	25.2	22.7	1.2	24.5	10.4	9.2	100

表II-2 島根県立の商業高等学校

項目 学科	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
商業科	6	8	26	29	1	56	45	8	179
情報科	2	0	7	4	0	5	7	2	27
会計科	0	0	4	6	0	6	5	4	25
合計	8	8	37	39	1	67	57	14	231
%	3.5	3.5	16.0	16.9	0.4	29.0	24.7	6.1	100

表II-3 島根県立の農林高等学校

項目 学科	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
農業科	2	1	7	10	0	9	0	4	33
園芸科	7	0	3	5	0	13	0	4	32
農土科	1	2	7	8	0	8	1	0	27
合計	10	3	17	23	0	30	1	8	92
%	10.9	3.3	18.5	25.0	0	32.6	1.1	8.7	100

同じように、各高校での学科について、学科選択の理由の度数(順位)が異なるか否かをカイ自乗によって有意差検定を行なった。

県立工業高校については、 $\chi^2=22.828 < \chi^2_{0.05}(14)=23.685$ となり、5%水準で有意とならなかった。すなわち、学科選択の理由が学科によって異なっているといえない。統計的には有意でないが、工業高校全体では、表II-4に示したように、上位の理由が「将来希望している職業に関連があったから」(25.2%)、「なんとなく」(24.5

表II-4 島根県立の各高校で学科を選んだ理由の上位3位の状況

学校 順位	工業	商業	農林
第一位	将来希望している職業に関連があった	なんとなく	なんとなく
%	25.2	29.0	32.6
第二位	なんとなく	資格を取得したかった	先生や周りの人にすすめられたから
%	24.5	24.7	25.0
第三位	先生や周りの人にすすめられたから	先生や周りの人にすすめられたから	将来希望している職業に関連があった
%	22.7	14.7	18.5

%)、「先生周りの人にすすめられた」(22.7%)などとなっている。

県立商業高校についても、 $\chi^2=14.190$ となり、5%水準で有意とならなかった。商業全体では、表II-4に示したように上位の理由が「なんとなく」(29.0%)、「資格を取得したかった」(24.7%)、「先生や周りの人にすすめられた」(14.7%) などとなっている。

県立農林高校についても、 $\chi^2=20.698$ となり、5%水準で有意とならなかった。農林全体では、表II-4に示したように上位の理由が「なんとなく」(32.6%)、「先生や周りの人にすすめられた」(25.0%)、「将来希望している職業に関連があったから」(18.5%) などとなっている。

島根県立の高校全体については $\chi^2=36.378 > \chi^2_{0.01}(14)=29.141$ となり、1%水準で有意であった。

すなわち、学校によって、学科が選択された理由項目の順位は異なるといえる。これを学校ごとに、1位の理由で見てみると、工業高校では「将来希望している職業に関連があったから」(25.2%)、商業高校では「なんとなく」(29.0%)、農林高校では「なんとなく」(32.6%) となっていて、学校によって学科選択に向けての目的意識に差異がみられた。

3つの各高校で共通して、学科選択の理由の度数(順位)が高かったものに、「将来希望している職業に関連があったから」、「先生や周りの人にすすめられた」、「資格を取得したかった」などが挙げられているのは、専門高校で学ぶ生徒の、ある意味での本音として受けとめられ、評価できよう。ただ、学校選択のときと同じように、理由のなかに「なんとなく」とあるのは、先にも述べたように、明確な目的意識を持たずに入学せざるを得なかった現実を垣間見るようで、今日的な課題の一つとして真剣に受け止める必要があろう。

北京市の各学校での専業についても、専業選択の理由の度数(順位)が異なるか否かをカイ自乗によって有意

表II (5~8)

質問項目 I-2 この学科(専業)を選んだ理由として、どのようなことが考えられましたか。

- a 好きな授業科目があるから
- b 得意な授業科目があるから
- c 将来希望している職業に関連があったから
- d 先生や周りの人にすすめられたから
- e なにも知らずに
- f なんとなく
- g 資格を取得したかった
- h その他 ()

に対する回答の結果

表II-5 北京市農業機械化学校

項目 専業	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
A専業	1	2	3	8	10	9	2	5	40
B専業	4	3	7	6	6	4	5	3	38
C専業	2	1	3	7	6	4	2	7	32
合計	7	6	13	21	22	17	9	15	110
%	6.4	5.5	11.8	19.1	20.0	15.5	8.2	13.6	100

A: 農業機械化 B: 機電設備維修 C: 農業機械製造

表II-6 北京市財経学校

項目 専業	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
A専業	3	2	5	7	6	5	2	6	36
B専業	7	3	7	5	4	3	3	1	33
C専業	16	9	15	13	9	6	7	3	78
合計	26	14	27	25	19	14	12	10	147
%	17.7	9.5	18.4	17.0	12.9	9.5	8.2	6.8	100

A: 工商金融 B: 経済信息管理 C: 会計

表II-7 北京市農業学校

項目 専業	a	b	c	d	e	f	g	h	合計
A専業	3	2	10	3	3	8	4	2	35
B専業	16	5	19	13	5	6	9	6	79
C専業	2	2	9	8	2	2	2	3	30
合計	21	9	38	24	10	16	15	11	144
%	14.6	6.3	26.4	16.7	6.9	11.1	10.4	7.6	100

A: 牧畜獣医 B: 園芸 C: 村・町建設

差検定を行なった。

北京市機械化学校については、 $\chi^2=12.545 < \chi^2_{0.05}(14)=23.685$ となり、5%水準で有意とならなかった。すなわち、専業選択の理由の専業によって異なるといえない。機械化学校全体では、表II-8に示したように、上位の理由が「なにも知らずに」(20.1%)「先生や周りの人にすすめられた」(19.1%)、「なんとなく」

表II-8 北京市の各学校で専業を選んだ理由の上位3位の状況

学校 順位	機械化	財経	農業
第一位	なにも知らずに	将来希望している職業に関連があった	将来希望している職業に関連があった
%	20.1	18.4	26.4
第二位	先生や周りの人にすすめられた	好きな授業科目があるから	先生や周りの人にすすめられた
%	19.1	17.7	16.7
第三位	なんとなく	先生や周りの人にすすめられた	好きな授業科目があるから
%	15.5	17.0	14.6

(15.5%) などとなっている。

財経学校についても、 $\chi^2=12.830$ となり、5%水準で有意とならなかった。財経学校全体では、上位の理由が「将来希望している職業に関連があったから」(18.4%)、「好きな授業科目があるから」(17.7%)、「先生や周りの人にすすめられた」(17.0%) などとなっている。

農業学校についても、 $\chi^2=14.315$ となり、5%水準で有意とならなかった。農業学校全体では、上位の理由が「将来希望している職業に関連があったから」(26.4%)「先生や周りの人にすすめられた」(16.7%)、「好きな授業科目があるから」(14.6%) などとなっている。

北京市の学校全体については、 $\chi^2=23.800 > \chi^2_{0.05}(14)=23.685$ となり、5%水準で有意であった。すなわち、学校によって選択された理由項目の順位に差異がみられ、専業を選択するうえで、目的意識に差があったといえる。

3つの学校において、共通して専業選択の理由の度数(順位)が高かったものに、「将来希望している職業に関連があったから」、「好きな授業科目があるから」などが挙げられているのは、専門学校で学ぶ生徒の、目的意識に基づいたものとして評価できよう。ただ、北京市農業機械化学校において、上位の1位と3位の理由が「なにも知らずに」、「なんとなく」とあるのは、この学校の今後の検討課題であるといえよう。

4-3 高校(学校)卒業後の職業と学科(専業)で学んだ専門との関連性

表III(1~4)及び表III(5~8)に示す。

各高校及び学科について、高校を卒業後、関連する職業に就きたいとする意向についての度数(順位)が異なるか否かをカイ自乗によって有意差検定を行なった。

県立工業高校については、 $\chi^2=23.692 > \chi^2_{0.01}(8)=$

表Ⅲ（1～4）

質問項目Ⅰ-3 高校を卒業したら、この学科で学んだことに関連する職業に就きたいと思いますか。

- a 強く思う d あまり思わない
- b そう思う e 全く思わない
- c まだ分からない

に対する回答の結果

表Ⅲ-1 島根県立の工業高等学校

項目	強く思う	そう思う	まだ分からない	あまり思わない	全く思わない	合計
学科						
機械科	8	28	5	18	17	76
電気科	22	19	5	10	2	58
土木科	8	13	3	1	4	29
合計	38	60	13	29	24	163
%	23.3	36.8	8.0	17.8	14.1	100

表Ⅲ-2 島根県立の商業高等学校

項目	強く思う	そう思う	まだ分からない	あまり思わない	全く思わない	合計
商業科	18	67	33	38	23	179
情報科	3	7	2	12	3	27
会計科	3	6	3	6	7	25
合計	24	80	38	56	33	231
%	10.4	34.6	16.5	24.2	14.3	100

表Ⅲ-3 島根県立の農林高等学校

項目	強く思う	そう思う	まだ分からない	あまり思わない	全く思わない	合計
農業科	2	4	10	9	8	33
園芸科	0	7	6	8	11	32
農土科	6	13	1	5	2	27
合計	8	24	17	22	21	92
%	8.7	26.1	18.5	23.9	22.8	100

表Ⅲ-4 この学科で学んだことに関連する職業への志向の上位状況

学校順位	工業	商業	農林
第一位%	そう思う 36.8	そう思う 34.6	そう思う 26.1
第二位%	強く思う 23.3	あまり思わない 24.2	あまり思わない 23.0
第三位%	あまり思わない 17.8	まだ分からない 16.5	全く思わない 22.8

20.090となり、1%水準で有意であった。すなわち、学科によって選択された項目の順位は異なるといえる。

これを学科毎にみてみると、機械科では「強く思う・そう思う」が(10.5%・36.8%)であるのに対して、「あまり思わない・全く思わない」が(23.7%・22.4%)になっていて、専門との関連性についての意向は半々であるといえる。

電気科では「強く思う・そう思う」が(37.9%・32.8%)であるのに対して、「あまり思わない・全く思わない」が(17.2%・3.4%)で、専門と関連のある職業に就きたいとする者が7割を超えている。

土木科では「強く思う・そう思う」が(27.6%・44.8%)で、「あまり思わない・全く思わない」が(3.4%・13.8%)となっていて、電気科と同じように専門と関連のある職業に就きたいとする者が7割を超えている。

このように、学科によって職業選択への意識に差異がみられた。工業全体では、表Ⅲ-4に示したように、1位の項目が「そう思う」(36.8%)、2位が「強く思う」(23.3%)となっている。

県立商業高校については、 $\chi^2=32.602 > \chi^2_{0.01}(8)=20.090$ となり、1%水準で有意であった。すなわち、学科によって選択された項目の順位は異なるといえる。

これを学科毎にみてみると、商業科では「強く思う・そう思う」が(10.1%・37.4%)であるのに対して、「あまり思わない・全く思わない」が(21.2%・12.8%)になっていて、専門と関連のある職業に就きたいとする者が10ポイントばかり高い。ただ、まだ分からないと回答した者(18.4%)がいた。

情報科では「強く思う・そう思う」が(11.1%・25.9%)であるのに対して、「あまり思わない・全く思わない」が(44.4%・11.1%)で、専門と関連のある職業に就きたくないとする者が55%を超えている。

会計科では「強く思う・そう思う」が(12.0%・24.0%)であるのに対して、「あまり思わない・全く思わない」が(24.0%・28.0%)で、専門との関連性についての意向は半々であるといえる。

学科によって職業選択への意識に差異がみられる。商業全体では、「そう思う」が34.6%で最も多く、次いで「あまり思わない」が24.2%、「まだわからない」(16.5%)の順になっている。

県立農林高校については、 $\chi^2=27.420 > \chi^2_{0.01}(8)=20.090$ となり、1%水準で有意であった。すなわち、学科によって選択された項目の順位は異なるといえる。

これを学科ごとに、最も高かった項目で見ると、農業科では「まだ分からない」(30.3%)、園芸科では「全く思わない」(34.4%)、農業土木科では「そう思う」(48.1%)などとなっていて、学科によって職業選択への意識に差異がみられた。農林高校全体では、第1位の項目が「そう思う」(26.1%)、2位が「あまり思わない」(23.0%)、3位が「全く思わない」(22.8%)の順になっている。

島根県立の各高校において、共通して選択された項目

表Ⅲ（5～8）

質問項目Ⅰ-3 学校を卒業したら、この専業で学んだことに関連する職業に就きたいと思いますか。

- a 強く思う d あまり思わない
b そう思う e 全く思わない
c まだ分からない

に対する回答の結果

表Ⅲ-5 北京市農業機械化学校

項目	強く思う	そう思う	まだ分からない	あまり思わない	全く思わない	合計
学科						
A専業	5	14	5	12	4	40
B専業	7	16	5	8	2	38
C専業	5	13	8	2	4	32
合計	17	43	18	22	10	110
%	15.5	39.1	16.4	20.0	9.1	100

A：農業機械化 B：機電設備維修 C：農業機械製造

表Ⅲ-6 北京市財経学校

A専業	8	18	5	4	1	76
B専業	7	16	6	3	1	58
C専業	18	42	12	4	2	29
合計	33	76	23	11	4	163
%	22.4	51.7	15.6	7.5	2.7	100

A：工商金融 B：経済信息管理 C：会計

表Ⅲ-7 北京市農業学校

A専業	8	13	5	6	3	76
B専業	17	37	6	13	6	58
C専業	5	16	5	2	2	29
合計	30	66	16	21	11	163
%	20.8	45.8	11.1	14.6	7.6	100

A：牧畜獣医 B：園芸 C：村・町建設

表Ⅲ-8 この専業で学んだことに関連する職業への志向の上位状況

学校順位	機械化	財経	農業
第一位%	そう思う 39.1	そう思う 51.7	そう思う 45.8
第二位%	あまり思わない 20.0	強く思う 22.4	強く思う 20.8
第三位%	まだ分からない 16.4	まだ分からない 15.6	全く思わない 11.1

の度数（順位）が高かったものに、「そう思う」が挙げられていた。ただ、高校を卒業したら、この学科で学んだことに関連する職業に就きたくないとする生徒が、工業高校で約31.9%、商業高校で約38.5%、農林高校で約46.7%であった。特に、農林高校で「全く思わない」（22.8%）

が、工業高校の14.1%、商業高校の14.3%に比べて突出しているのも一つの特徴といえる。

このことについては、「卒業後の就職希望」の項で、全国状況の資料を提示して、後に述べる。

北京市の各学校及び専業についても、学校卒業後に関連する職業に就きたいとする意向に、差があるのか否かをカイ自乗によって有意差検定を行なった。

北京市機械化学校については、 $\chi^2=8.888 < \chi^2_{0.05}(8)=15.507$ となり、5%水準で有意とならなかった。すなわち、専業によって職業選択への意識は異なるといえない。機械化学校全体では、表Ⅲ-8に示したように、意識で上位のものは「そう思う」が39.1%、「あまり思わない」が20.0%、「まだ分からない」が16.4%などとなっている。

北京市財経学校については、 $\chi^2=16.316 > \chi^2_{0.05}(8)=15.507$ となり、5%水準で有意であった。すなわち、専業によって職業選択への意識は異なるといえる。財経学校全体では、「そう思う」が51.7%で最も多く、次いで「強くそう思う」が22.4%、「まだ分からない」（15.6%）の順となっている。

北京市農業学校についても、 $\chi^2=15.621 > \chi^2_{0.05}(8)=15.507$ となり、5%水準で有意であった。すなわち、専業によって職業選択への意識は異なるといえる。農業学校全体では、「そう思う」が45.8%で最も多く、次いで「強くそう思う」が20.0%、「全く思わない」（11.1%）の順となっている。

北京市の各学校において、共通して選択された項目の度数（順位）が高かったものは、「そう思う」、「強くそう思う」である。特に、学校を卒業したら、この専業で学んだことに関連する職業に就きたいとする生徒が、財経学校で約74.1%、農業学校で約66.6%であった。

このことから、島根県立の専門高校に比べて、北京市の専門学校で学んだことに関連する職業に就きたいとする意向が強いことを示した。

4-4 この高校（学校）の学科（専業）へ進学したことへの満足度について

表Ⅳ-1から表Ⅳ-8に示す。

島根県立の高校の場合、高校によって、学科で「満足度」にやや差がみられた。工業高校では、「良かったと強く思う・少しは思う」が機械科で約62%であったのに対して、電気科と土木科で約85%と97%で、20ポイント以上も高かった。また、商業高校でも、商業科で約89%と他の2学科で約70%に比べて20ポイント近く高かった。農林高校では、3学科で約79%～85%と、他の高校ほど

表Ⅳ

質問項目Ⅰ-4 この高校(学校)、この学科(専業)を選んだことは、自分にとって良かったと思いますか。

- a 強く思う d あまり思わない
b 少しは思う e 全く思わない

に対する回答の結果

表Ⅳ-1 島根県立の工業高等学校

項目 学科	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない	合計
機械科	11	36	16	13	76
電気科	17	32	9	0	58
土木科	16	12	0	1	29
合計	44	80	25	14	163
%	27.0	49.1	15.3	8.6	100

表Ⅳ-2 島根県立の商業高等学校

項目 学科	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない	合計
商業科	55	105	17	2	179
情報科	6	13	6	2	27
会計科	4	13	5	3	25
合計	65	131	28	7	231
%	28.1	56.7	12.1	3.0	100

表Ⅳ-3 島根県立の農林高等学校

項目 学科	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない	合計
農業科	9	17	7	0	33
園芸科	4	22	4	2	32
農土科	8	15	4	0	27
合計	21	54	15	2	92
%	22.8	58.7	16.3	2.2	100

表Ⅳ-4 この高校、学科を選んだことが、自分にとって良かったとする意識の上位2位の状況

学校 順位	工 業	商 業	農 林
第一位	少しは思う 49.1	少しは思う 56.7	少しは思う 58.7
第二位	強くそう思う 27.0	強くそう思う 28.1	強くそう思う 22.8

には差がみられなかった。

3つの高校全体の状況は、表Ⅳ-4に示すように類似している。すなわち、3つの高校ともに、「少しは思う」が約49%~59%で最も多く、次いで「強くそう思う」が約23%~28%であった。

満足している・やや満足しているを合わせて72~87%で、概ね満足している結果といえる。

ここに、高等学校農業科生徒の在籍学科への満足度と全国高校生の学校生活への満足度の調査研究資料から作成された貴重なデータがあるので、比較資料として紹介

表Ⅳ-5 北京市農業機械化学校

項目 専業	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない	合計
A専業	6	17	11	6	40
B専業	7	18	10	3	38
C専業	6	12	8	6	32
合計	19	47	29	15	110
%	17.3	42.7	26.4	13.6	100

A:農業機械化 B:機電設備維修 C:農業機械製造

表Ⅳ-6 北京市財経学校

項目 専業	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない	合計
A専業	8	21	6	1	36
B専業	7	17	7	2	33
C専業	16	32	14	16	78
合計	31	70	27	19	147
%	21.1	47.6	18.4	12.9	100

A:工商金融 B:経済信息管理 C:会計

表Ⅳ-7 北京市農業学校

項目 専業	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない	合計
A専業	5	18	8	4	35
B専業	17	35	19	8	79
C専業	6	12	8	4	30
合計	28	65	35	16	144
%	19.4	45.1	24.3	11.1	100

A:牧畜獣医 B:園芸 C:村・町建設

表Ⅳ-8 この学校、専業を選んだことが、自分にとって良かったとする意識の上位2位の状況

学校 順位	機 械 化	財 経	農 業
第一位	少しは思う 42.7	少しは思う 47.6	少しは思う 45.1
第二位	あまり思わない 26.4	強くそう思う 21.1	あまり思わない 24.3

《満足》《普通》《不満》 単位[%]

A県農業高校	56.1	28.8	15.1	A県平成8年度調査
B農業高校	38.7	40.9	20.4	B校平成8年度調査
C農業高校	77.7	—	22.4	C校平成8年度調査
D農業高校	79.6	—	20.4	D校平成8年度
E農業高校	80.0	—	20.0	E校平成8年度調査
全国高校生	64.3	—	35.8	文部省平成6年調査

資料出所:「産業教育」第48巻,第2号から抜粋

しておく。

北京市の学校の場合、機械化学校と農業学校では、専業による満足度の差があまりみられず、「良かったと強

く思う・少しは思う」が約56%~66%だった。また、財経学校では、工商金融専業で約81%であったのに対して、他の専業が約73%と62%で、10ポイントづつの差がみられた。

3つの学校全体の状況は、表IV-8に示したように、「少しは思う」が40%台で最も多く、各学校に共通している。なかでも、機械化学校と農業学校の2校は類似した結果を示している。ただ、財経学校では「強くそう思う」が21%で2番目に多くなっている。

概ね満足している結果といえるが、県立の高校全体と比べてやや低い。

4-5 学校内での実験・実習(または演習)等について

1. 実験・実習(または演習)時間内での目標とする活動の達成度

表V-1に示す。

島根県立の3つの高校において、学校内での実験・実習(または演習)で、目標とする活動ができたとして「少しは思う」が約60%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約26%であった。しかし、「強くそう思う・少しは思う」の合計が県立高校全体で70%を僅かに超えていて、やや肯定的に受け止められていた。

北京市の3つの学校においても、「少しは思う」が約52%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約29%であった。「強くそう思う・少しは思う」の合計が北京市の学校全体で63%となっていて、県立高校に比べて7ポイント程度少ないが肯定的に受け止められていて、日中で同じ傾向を示した。

目標とする活動の達成度には、主観的・客観的な目標の質と量が、常に重要な関わりをもつことに配慮する必要がある。

2. 実験・実習(または演習)の時間数を増やしたほうが良いか

表V-2に示す。

県立の3つの高校においては、「あまり思わない」が約41%で最も多く、次いで「少しは思う」が約32%であった。「強くそう思う・少しは思う」の合計が県立高校全体の約49%を占め、賛否が半々になっている。

北京市の3つの学校においては、「少しは思う」が約49%で最も多かったが、次いで「あまり思わない」も30%であった。しかし、「強くそう思う・少しは思う」の合計が北京市の学校全体で約64%となっていて、賛成の方が過半数を超えている。

表V-1 学校内での実験・実習(または演習)では、決められた時間内で、目標とする活動ができたと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

()内の数字は%

学校	項目	強くそう思う	少しは思う	あまり思わない	全く思わない
県立の3校		55 (11.3)	287 (59.1)	127 (26.1)	17 (3.5)
	工業高校	29 (17.8)	97 (59.5)	30 (18.4)	7 (4.3)
	商業高校	16 (6.9)	135 (58.5)	73 (31.6)	7 (3.0)
北京の3校	農林高校	10 (10.9)	55 (59.8)	24 (26.0)	3 (3.3)
	機械化学校	45 (11.2)	208 (51.9)	115 (28.7)	33 (8.2)
	財経学校	18 (16.4)	55 (50.0)	28 (25.4)	9 (8.2)
農業学校		10 (6.8)	72 (49.0)	49 (33.3)	16 (10.9)
		17 (11.8)	81 (56.2)	38 (26.4)	8 (5.6)

先にみてきたように、現行のカリキュラムでは、北京市の学校が実験・実習(または演習)の時間数を多く配当しているにもかかわらず、増やしたほうが良いという結果が示された。

3. 実験・実習(または演習)は、楽しいと思うか

表V-3に示す。

県立の3つの高校においては、「少しは思う」が約55%で最も多く、次いで「あまり思わない」が24%であった。しかし、「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が県立高校全体で70%を越えて、好意的に受け止められている。

北京市の3つの学校においても、「少しは思う」が約54%で最も多く、次いで「あまり思わない」が29%であった。「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が北京市の学校全体で66%となっていて、県立全体より4ポイント程度少ないが好意的に受け止められていて、日中で同じ傾向を示した。

実験・実習(または演習)などのような、経験的・実践的な学習への関心、意欲を高めながら、課題解決の能力や態度を育成すると同時に、個性を見出し伸張を図ることに活かしたいものである。

表V-2 学校内での実験・実習（または演習）の時間数をもっと増やしたほうが良いと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	85 (17.5)	154 (31.7)	195 (41.1)	52 (10.7)
工業高校	31 (19.0)	47 (28.9)	61 (37.4)	24 (14.7)
商業高校	41 (17.7)	87 (37.7)	89 (38.5)	14 (6.1)
農林高校	13 (14.1)	20 (21.7)	45 (49.0)	14 (3.3)
北京の3校	60 (15.0)	195 (48.6)	120 (30.0)	26 (6.4)
機械化学校	18 (16.3)	63 (57.3)	22 (20.0)	7 (6.4)
财经学校	24 (16.3)	77 (52.4)	40 (27.2)	6 (4.1)
農業学校	18 (12.5)	55 (38.2)	58 (40.3)	13 (9.0)

表V-3 学校内での実験・実習（または演習）は、楽しいあるいは楽しかったと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	77 (15.8)	265 (54.5)	117 (24.1)	27 (5.6)
工業高校	27 (16.6)	88 (54.0)	37 (22.7)	11 (6.7)
商業高校	35 (15.2)	125 (54.1)	60 (26.0)	11 (4.7)
農林高校	15 (16.3)	52 (56.5)	20 (21.7)	5 (5.4)
北京の3校	46 (11.5)	216 (54.0)	114 (28.5)	24 (6.0)
機械化学校	15 (13.6)	63 (57.3)	25 (22.7)	6 (5.5)
财经学校	15 (10.2)	74 (50.3)	46 (31.3)	16 (8.2)
農業学校	16 (11.1)	79 (54.9)	43 (29.9)	6 (4.2)

表V-4 学校内での実験・実習（または演習）は、普通の授業に比べて好きあるいは好きだったと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	122 (25.1)	223 (45.9)	113 (23.2)	28 (5.8)
工業高校	44 (27.0)	65 (40.0)	43 (26.4)	11 (6.7)
商業高校	50 (21.6)	118 (51.1)	51 (22.1)	12 (5.2)
農林高校	28 (30.4)	40 (43.4)	19 (20.7)	5 (5.4)
北京の3校	67 (16.7)	214 (53.4)	104 (25.9)	16 (4.0)
機械化学校	20 (18.2)	58 (52.7)	29 (26.4)	3 (2.7)
财经学校	24 (16.3)	85 (57.8)	33 (22.4)	5 (3.4)
農業学校	23 (16.0)	71 (49.3)	42 (29.2)	8 (5.6)

4. 実験・実習（または演習）は、普通の授業に比べて好きか

表V-4に示す。

県立の3つの高校において、学校内での実験・実習（または演習）は、普通の授業に比べて好きだったかに対しては、「少しは思う」が約46%で最も多く、次いで「強くそう思う」が約25%であった。「少しは思う・強くそう思う」の合計が県立高校全体の71%で、実験・実習（または演習）は、普通の講義形式の授業に比べてかなり好意的に受け止められている。

北京市の3つの学校においては「少しは思う」が約53%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約26%であった。しかし、「強くそう思う・少しは思う」の合計が北京市の学校全体で70%となっていて、日中でほぼ同じ傾向を示した。

5. 新しい課題での実験・実習（または演習）に、既習の知識・技能を関連づけたか

表V-5に示す。

県立の高校及び北京の学校において、「少しは思う」が約49%と50%で、共に最も多く、次いで「あまり思わない」が約36%と34%であった。しかし、「強くそう思う・少しは思う」の合計が日中両方とも全体の約57%を占め、

表V-5 新しい課題について、実験・実習（または演習）する時に、すでに習得した知識や技術・技能と関連づけることができたと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	39 (8.0)	236 (48.6)	174 (35.8)	37 (7.6)
工業高校	14 (8.6)	73 (44.8)	60 (36.8)	16 (9.8)
商業高校	19 (8.2)	121 (52.4)	78 (33.8)	13 (5.6)
農林高校	6 (6.5)	42 (45.7)	36 (39.1)	8 (8.7)
北京の3校	27 (6.8)	199 (49.6)	137 (34.1)	38 (9.5)
機械化学校	9 (8.2)	57 (51.8)	36 (32.7)	8 (7.3)
財経学校	11 (7.5)	74 (50.3)	48 (32.7)	14 (9.5)
農業学校	7 (4.9)	68 (47.2)	53 (36.8)	16 (11.1)

やや肯定的に受け止められていて、同じ傾向を示した。

いうまでもなく、専門高校の目標の一つには、産業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技能を身に付けることにあるが、重要なことは、実験・実習などの体験学習と既習の知識との結合によって、課題を解決する実践的な力を育成することである。

6. 実験・実習(または演習)を通して、進んで技術・技能の向上を心がけたか

表V-6に示す。

県立の高校及び北京市の学校において、実験・実習(または演習)を通して、自分から進んで技術の向上を心がけたかに対しては、「少しは思う」がそれぞれ約44%と47%、次いで「あまり思わない」がそれぞれ約39%と37%であった。

しかし、「強くそう思う・少しは思う」の合計が各々全体の約53%と55%で、前向きな態度を示した者が半数を超えていて、日中で同じ傾向を示した。

7. 実験・実習(または演習)で学んだことは、日常生活に役立っているか

表V-6 学校内での実験・実習(または演習)を通して、自分から進んで技術的な技能の向上を心掛けたと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	46 (9.5)	213 (43.8)	187 (28.5)	40 (8.2)
工業高校	23 (14.1)	68 (41.7)	61 (37.4)	11 (6.7)
商業高校	15 (6.5)	108 (46.7)	90 (39.0)	18 (7.8)
農林高校	8 (8.7)	37 (40.2)	36 (39.1)	11 (12.0)
北京の3校	31 (7.7)	188 (46.9)	148 (36.9)	34 (8.5)
機械化学校	9 (8.2)	55 (50.0)	40 (36.4)	6 (5.5)
財経学校	9 (6.1)	77 (52.4)	43 (29.3)	18 (12.2)
農業学校	13 (9.0)	56 (39.9)	65 (45.1)	10 (6.9)

表V-7に示す。

実験・実習(または演習)で学んだ内容や技術・技能が日常生活に役立っていることに対して、県立の3高校においては、「少しは思う」が約41%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約37%、「全く思わない」(14.6%)、「強くそう思う」(7.3%)の順であった。

「強くそう思う・少しは思う」を合わせたものが約48%で、半数近くが肯定的に評価している。

北京市の3学校においては、「少しは思う」が約50%で最も多く、次いで「あまり思わない」が32%、「強くそう思う」(11.0%)、「全く思わない」(7.2%)の順になっている。

しかし、「強くそう思う・少しは思う」を合わせたものが学校全体で約61%となっていて、県立の3高校と比べて、より積極的に評価している。

8. 実験・実習(または演習)で学んだことを、日常生活に活かしているか

表V-8に示す。

県立の3高校において、「あまり思わない」が約49%で最も多く、次いで「少しは思う」が約27%、「全く思わな

表V-7 学校内での実験・実習（または演習）で学んだ内容や技術・技能は日常生活に役立っていると思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	35 (7.3)	198 (40.7)	182 (37.4)	71 (14.6)
工業高校	14 (8.6)	62 (38.0)	59 (36.2)	28 (17.2)
商業高校	13 (5.6)	99 (42.9)	87 (37.7)	32 (13.8)
農林高校	8 (8.7)	37 (40.2)	36 (39.1)	11 (12.0)
北京の3校	44 (11.0)	200 (49.9)	128 (31.9)	29 (7.2)
機械化学校	15 (13.6)	56 (50.9)	32 (29.1)	7 (6.4)
財經学校	17 (11.6)	79 (53.7)	41 (27.9)	10 (6.8)
農業学校	12 (8.3)	65 (45.1)	55 (38.2)	12 (8.3)

表V-8 学校内での実験・実習（または演習）で習得した知識や技術・技能を自分の日常生活に活かしていると思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	21 (4.2)	131 (27.0)	237 (48.8)	97 (20.0)
工業高校	13 (8.0)	42 (25.8)	75 (46.0)	33 (20.2)
商業高校	6 (2.6)	68 (29.5)	114 (49.3)	43 (18.6)
農林高校	2 (2.2)	21 (22.8)	48 (52.2)	21 (22.8)
北京の3校	28 (6.9)	198 (49.4)	139 (34.7)	36 (9.0)
機械化学校	10 (9.1)	62 (56.4)	29 (26.4)	9 (8.2)
財經学校	13 (8.8)	83 (56.4)	40 (27.2)	11 (7.5)
農業学校	5 (3.5)	53 (36.8)	70 (48.6)	16 (11.1)

い」(20.0%)、「強くそう思う」(4.2%)の順になっている。肯定的に受け止めている者が3分の1に過ぎない。

北京市の3学校においては、逆に「少しは思う」が49.4%で最も多く、次いで「あまり思わない」が34.7%、「全く思わない」(9.0%)、「強くそう思う」(6.9%)の順になっている。

「強くそう思う・少しは思う」の合計が全体で56%になっていて、県立の3つの高校と比べて過半数の者が肯定的に受け止めている。

しかし、北京市の農業学校は県立の3高校と同じように、「あまり思わない」が最も多い約49%、次いで「少しは思う」が約37%である。「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が半分以下の約40%で、やや否定的に受け止められていた。

9. 実験・実習（または演習）を通して、身近な技術との関わりを進んで考えるようになったか

表V-9に示す。

県立の3高校において、「あまり思わない」が43%で最も多く、次いで「少しは思う」が36%、「全く思わない」(14%)、「強く思う」(7%)の順であった。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が県立全体の約43%で、やや否定的に受け止められている。しかし、県立工業高校は「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が約66%で、肯定的に受け止められており、学校による差がみられた。

北京市の3学校においては、「少しは思う」が約50%で最も多く、次いで「あまり思わない」が35.2%、「強くそう思う」(7.9%)、「全く思わない」(7.0%)の順になっている。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約58%となっていて、県立の3高校に比べて、やや肯定的に受け止められていた。

10. 実験・実習（または演習）は、学習内容として非常に重要だと思うか

表V-10に示す。

県立の3高校においては、「少しは思う」が51.4%で最も多く、次いで「強くそう思う」が27.5%、「あまり思わない」(16%)、「全く思わない」(5.1%)の順になっている。「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約77%となっていて、非常に重要視していることがわかる。

北京市の3つの学校においては、「すこしは思う」が54.4%で最も多く、次いで「強くそう思う」が22.7%、「あまり思わない」(21.2%)、「全く思わない」(1.7%)の順に

表V-9 学校内での実験・実習（または演習）を通して、自分に身近な技術とのかかわりを進んで考えるようになったと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	34 (7.0)	175 (36.0)	209 (43.0)	68 (14.0)
工業高校	18 (11.0)	74 (54.5)	53 (32.5)	18 (11.0)
商業高校	7 (3.0)	75 (32.5)	110 (47.6)	39 (16.9)
農林高校	9 (9.8)	26 (28.3)	46 (50.0)	11 (12.0)
北京の3校	32 (7.9)	200 (49.9)	141 (35.2)	28 (7.0)
機械化学校	10 (9.1)	63 (57.3)	28 (25.5)	9 (8.2)
財経学校	13 (8.8)	74 (50.3)	52 (35.4)	8 (5.4)
農業学校	9 (6.2)	63 (43.8)	61 (42.4)	11 (7.6)

表V-10 学校内での実験・実習（または演習）は、学習内容として非常に重要だと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の3校	133 (27.5)	250 (51.4)	78 (16.0)	25 (5.1)
工業高校	52 (31.9)	79 (48.5)	26 (16.0)	6 (3.7)
商業高校	53 (22.9)	120 (51.9)	42 (18.3)	16 (6.9)
農林高校	28 (30.4)	51 (55.4)	10 (10.9)	3 (3.3)
北京の3校	91 (22.7)	218 (54.4)	85 (21.2)	7 (1.7)
機械化学校	38 (34.5)	56 (50.9)	15 (13.6)	1 (1.0)
財経学校	25 (17.0)	88 (60.0)	30 (20.4)	4 (2.7)
農業学校	28 (19.4)	74 (51.4)	40 (27.8)	2 (1.4)

なっている。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約77%になっていて、県立の3つの高校と比べて、2ポイント程度少ないが重要視していることがわかり、日中で類似した傾向を示した。

4-6 産業現場実習及び企業・現場見学等について

この質問項目に関わる以下の小項目については、産業現場実習及び企業・現場見学等が、調査の時点で実際に実施されていた島根県立の2つの高校と北京市の2つの学校の生徒に回答を求めた。

先に示した、理科教育及び産業教育審議会の、「今後の専門高校における教育の在り方等について」の提言の一つに、《地域や産業界とのパートナーシップの確立》がある。

それによれば、「生徒の在学中における就業体験(インターンシップ)を積極的に実施するよう奨励する。具体的には、学校教育活動の一環として取り組むほか、企業等が主体となるものに生徒が参加する場合にも単位認定する。…中略」。また、「専門学校と地域との意見交換のための恒常的な場の設置を図るなど、地域に開かれた専門高校づくりを推進する。」としている。

本研究での対象校では、このうち、すでに実施されているところもある。

これは、より経験的・実践的な教育活動を取り入れることにより、将来の職業選択や職業生活に資するため、実際の企業・農家において、一定期間に職業体験を行なう、体験学習を重視した教育活動であるといえる。

同時に、地域との連携を一層強めることによって、地域産業の継承や振興に期待をかけた教育施策であるといえよう。

実際に、産業現場実習などを体験した生徒達は、どのように受けとめたのだろうか。

1. 産業現場実習などの時間内での目標とする活動の達成度

表VI-1に示す。

県立の2つの高校についてみると、工業高校では、「少しは思う」が約51%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約22%、「強くそう思う」(19.8%)、「全く思わない」(7.6%)の順になっている。一方の農林高校では、「あまり思わない」が55.4%で最も多く、次いで「少しは思う」が34.8%、「全く思わない」(5.4%)、「強くそう思う」(4.3%)の順になっている。

表VI-1 産業現場実習または企業・現場見学などでは、決められた時間内で、目標とする活動ができたと思いますか。
 a 強く思う c あまり思わない
 b 少しは思う d 全く思わない
 に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の2校	35 (14.0)	113 (45.2)	85 (34.0)	17 (6.8)
工業高校	31 (19.6)	81 (51.3)	34 (21.5)	12 (7.6)
農林高校	4 (4.3)	32 (34.8)	51 (55.4)	5 (5.4)
北京の2校	32 (12.6)	126 (49.6)	78 (30.7)	18 (7.1)
機械化学校	13 (11.8)	58 (52.7)	33 (30.0)	6 (5.5)
農業学校	19 (13.2)	68 (47.2)	45 (31.3)	12 (8.3)

表VI-2 産業現場実習または企業・現場見学などは、楽しかったと思いますか。
 a 強く思う c あまり思わない
 b 少しは思う d 全く思わない
 に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強く思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の2校	41 (16.4)	113 (45.2)	67 (26.8)	29 (11.6)
工業高校	34 (21.5)	70 (44.3)	31 (19.6)	23 (14.6)
農林高校	7 (7.6)	43 (46.7)	36 (39.1)	6 (6.5)
北京の2校	45 (17.7)	128 (50.4)	69 (27.2)	12 (4.7)
機械化学校	25 (22.7)	58 (52.7)	21 (19.1)	6 (5.5)
農業学校	20 (13.9)	70 (48.6)	48 (33.3)	6 (4.2)

その結果、「強く思う・少しは思う」の合計が、工業高校では約71%と高く評価していたのに対して、農林高校では約39%で、対照的に評価が低く、学校による差異がみられた。

北京市の学校においては、「少しは思う」が約50%、次いで「あまり思わない」が約31%である。「強く思う」と「少しは思う」の合計が、全体で約62%になっていて、やや肯定的に評価されている。

2. 産業現場実習などは、楽しかったかと思うか

表VI-2に示す。

県立の2つの高校についてみると、工業高校では、「少しは思う」が44.3%で最も多く、次いで「強く思う」が21.5%、「あまり思わない」(19.6%)、「全く思わない」(14.6%)の順になっている。一方の農林高校では、「少しは思う」が46.7%で最も多くなっているが、次いで「あまり思わない」が39.1%の高いポイントで続いている。

工業高校では、「少しは思う・強く思う」の合計が65.8%になっている。

ここでも、工業高校では好意的に、農林高校では否定的に受け止められていた。

先の質問、「目標とする活動の達成度」に対する回答を受けたような結果がみられる。つまり、産業現場実習な

どでの目標とする活動の達成感が、実習の楽しみを感じさせたか否かに深く関わっていることを示しているといえる。

北京市の学校についてみると、機械化学校で、「少しは思う」が52.7%で最も多く、次いで「強く思う」が22.7%、「あまり思わない」(19.1%)などとなっている。農業学校では、「少しは思う」が48.6%で最も多くなっているが、次いで「あまり思わない」が33.3%で高くなっている。

しかしながら、機械化学校では、「少しは思う・強く思う」の合計が75.4%に、農業学校では62.5%になっている。全体としては、肯定的に受け止められていた。

3. 産業現場実習などは、学校での実験・実習等より有意義だったか

表VI-3に示す。

県立の2つの高校についてみると、工業高校では「少しは思う」が約40%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約27%であった。「強く思う」と「少しは思う」の合計が約63%になっていて、やや肯定的に受け止められている。農林高校では逆に、「あまり思わない」が約59%で最も多く、次いで「少しは思う」が約35%であった。また、「強く思う」と「少しは思う」の合計が36%で、

表VI-3 産業現場実習または企業・現場見学などは、学校での実験・実習に比べて、より有意義だったと思いますか。

a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

学校	項目	強くそう思う	少しは思う	あまり思わない	全く思わない
県立の2校		38 (15.2)	95 (38.0)	96 (38.4)	21 (8.4)
	工業高校	37 (23.4)	63 (39.9)	42 (26.6)	16 (10.1)
農林高校	1 (1.1)	32 (34.8)	54 (58.7)	5 (5.4)	
北京の2校		26 (10.2)	131 (51.6)	82 (32.3)	15 (5.9)
	機械化学校	18 (16.4)	56 (50.9)	27 (24.5)	9 (8.2)
農業学校	8 (5.6)	75 (52.1)	55 (38.2)	6 (4.2)	

表VI-4 産業現場実習または企業・現場見学などは、学習内容として非常に重要だと思いますか。

a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない

に対する回答の結果

() 内の数字は%

学校	項目	強くそう思う	少しは思う	あまり思わない	全く思わない
県立の2校		56 (22.4)	109 (43.6)	68 (27.2)	17 (6.8)
	工業高校	43 (27.2)	72 (45.6)	27 (17.1)	16 (10.1)
農林高校	13 (14.1)	37 (40.2)	41 (44.6)	1 (1.1)	
北京の2校		42 (10.2)	131 (51.6)	75 (32.3)	11 (5.9)
	機械化学校	16 (14.5)	56 (46.4)	38 (34.5)	5 (4.5)
農業学校	26 (18.1)	77 (52.1)	37 (25.7)	6 (4.2)	

比較的否定的に受け止められている。ここでも、両校の生徒の意識に差異がみられた。

北京市の2つの学校では、「少しは思う」が約51%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約32%である。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約62%となっていて、産業現場実習の意義を肯定する者が過半数を超えていた。

4. 産業現場実習などは、学習内容として非常に重要だと思うか

表VI-4に示す。

県立の2つの高校についてみると、工業高校では「少しは思う」が45.6%で最も多く、次いで「強くそう思う」が27.2%であった。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が72.8%となっていて、やや肯定的に受け止められている。農林高校では、「少しは思う」が40.2%で最も多く、次いで「あまり思わない」が44.6%であった。また、「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が54.3%で、積極的な支持はみられない。ここでも、両校の生徒の意識に差異がみられた。

北京市の学校においては、「少しは思う」が約52%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約32%、「強くそう思う」(10.2%)の順になっている。

2つの学校で、大きな差がみられず、「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約62%となっていて、その重要性をやや認めている。

5. 産業現場実習などの時間数をもっと増やしたほうが良いか

表VI-5に示す。

県立の2つの高校についてみると、工業高校では「あまり思わない」が36.1%で最も多く、次いで「少しは思う」(22.8%)、「強くそう思う」(22.2%)、「全く思わない」(19%)であった。

「あまり思わない・全く思わない」の合計が約55%となっている。農林高校では、「あまり思わない」が62%で最も多く、次いで「少しは思う」が23.9%、「全く思わない」(9.8%)などであった。また、「あまり思わない・全く思わない」の合計が約72%であった。

時間数を増やすことには否定的で、現状維持を支持しているとみられる。

北京の2つの学校においては、逆に「少しは思う」が約46%で最も多く、次いで「あまり思わない」が約38%で、「強くそう思う」(10.6%)などとなっている。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が学校全体で約56%となっていて、積極的な賛否もなく、現状維持を支持しているといえる。

表VI-5 産業現場実習または企業・現場見学などの時間数をもっと増やしたほうが良いと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の2校	39 (15.6)	58 (23.2)	114 (45.56)	39 (15.6)
工業高校	35 (22.2)	36 (22.8)	57 (36.1)	30 (19.0)
農林高校	4 (4.3)	22 (23.9)	57 (62.0)	9 (9.8)
北京の2校	27 (10.6)	116 (45.5)	98 (38.4)	14 (5.5)
機械化学校	10 (9.1)	55 (50.0)	41 (37.3)	4 (3.6)
農業学校	17 (11.8)	61 (42.4)	57 (39.6)	10 (6.9)

6. 産業現場実習をする時に、学校での実験・実習等で既習の知識や技術・技能を関連づけたか

表VI-6に示す。

県立の2つの高校においては、「あまり思わない」が約

表VI-6 産業現場実習または企業・現場見学などををする時に、学校での実験・実習等で、すでに習得した知識や技術・技能と関連づけることができたと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の2校	9 (3.6)	79 (31.6)	123 (49.2)	39 (15.6)
工業高校	7 (4.4)	62 (39.2)	59 (37.3)	30 (19.0)
農林高校	8 (2.2)	17 (18.5)	64 (69.6)	9 (9.8)
北京の2校	32 (12.1)	136 (51.5)	79 (30.0)	17 (6.4)
機械化学校	8 (7.3)	61 (55.4)	30 (27.3)	11 (10.0)
農業学校	24 (16.7)	75 (52.1)	49 (34.0)	6 (4.2)

49%で最も多く、「少しは思う」が約32%になっている。また、「あまり思わない」と「全く思わない」の合計が約65%で、比較的否定的に受け止められていた。

北京市の2つの学校においては、「少しは思う」が約52%で最も多くなっているが、次いで「あまり思わない」が約30%になっている。

「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約64%になっていて、県立高校とは逆に比較的肯定的に受け止められている。

7. 産業現場実習を通して、進んで技術・技能の向上を心がけたか

表VI-7に示す。

県立の高校においては、「あまり思わない」が約44%で最も多く、次いで「少しは思う」が約33%などとなっている。

「あまり思わない」と「全く思わない」の合計が学校全体の約60%で、やや消極的な姿勢が感じられる。

北京の学校においては、「少しは思う」が約48%、次いで「あまり思わない」が約31%などとなっている。

しかし、「強くそう思う」と「少しは思う」の合計が全体で約60%となっていて、県立の高校と比べて、意欲的な姿勢がみられる。

表VI-7 産業現場実習または企業・現場見学などを通して、自分から進んでより一層の技術的な技能の向上を心掛けたと思いますか。

- a 強くそう思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

項目 学校	強くそう 思う	少しは思 う	あまり思 わない	全く思わ ない
県立の2校	18 (7.2)	83 (33.2)	109 (43.6)	40 (16.0)
工業高校	13 (8.2)	62 (39.2)	61 (38.6)	22 (13.9)
農林高校	5 (5.4)	21 (22.8)	48 (52.1)	18 (19.6)
北京の2校	30 (11.8)	122 (48.0)	79 (31.1)	23 (9.1)
機械化学校	8 (7.2)	60 (45.5)	42 (38.2)	10 (9.1)
農業学校	22 (15.3)	62 (43.1)	37 (25.7)	13 (9.0)

表VI-8 産業現場実習または企業・現場見学などで学んだ内容や技術・技能は、学校での実験・実習に比べて、より多く日常生活に役立っていると思いますか。

- a 強く思う c あまり思わない
b 少しは思う d 全く思わない
- に対する回答の結果

() 内の数字は%

学校	項目	強く思う	少しは思う	あまり思わない	全く思わない
県立の2校		26	102	88	34
		(10.4)	(40.8)	(35.2)	(13.6)
工業高校		21	72	40	25
		(13.3)	(45.6)	(25.3)	(15.8)
農林高校		5	30	48	9
		(5.4)	(32.6)	(52.1)	(9.8)
北京の2校		26	131	82	15
		(10.2)	(51.6)	(32.3)	(5.9)
機械化学校		9	54	35	12
		(8.2)	(49.1)	(31.8)	(10.9)
農業学校		12	70	52	10
		(8.3)	(48.6)	(36.1)	(6.9)

8. 産業現場実習で学んだことは、学校での実験・実習等に比べて、日常生活に役立っている、あるいは将来役立つと思うか

表VI-8に示す。

県立の2つの高校において、工業高校は、「少しは思う」が約46%、次いで「あまり思わない」が約25%になっている。「強く思う」と「少しは思う」の合計が約59%で、やや肯定的に受け止められている。逆に農林高校は、「あまり思わない」が約52%、次いで「少しは思う」が約33%である。「強く思う」と「少しは思う」の合計が約38%で、比較的否定的に受け止められている。

北京市の2つの学校においては、「少しは思う」が約52%、次いで「あまり思わない」が約32%である。また、「強く思う」と「少しは思う」の合計が全体で約62%になっていて、島根県立の2つの高校と比べて日常生活で、有意義であることを高く評価している。

4-7 普通科目と専門科目での授業形態及び授業時数等について

先にも示したように、教育課程審議会は、「教育課程の基準の改善について」の答申をした。

文部省では、この答申を受け、学習指導要領の改訂を終え、高等学校については、平成15年度から学年進行により実施する予定である。

完全学校週五日制の下、授業時数の縮減により、高等

学校の卒業に必要な修得総単位数は、現行の80単位を74単位数に縮減する。そのため、共通に学ぶ必修科目の合計単位数は現行の38単位（普通科）を31単位数に縮減する。

また、理科教育及び産業教育審議会の、専門高校における「教育課程の基準の改善」によれば、専門教育に関する必修単位数を30単位数から25単位数に削減する。現在、各学科に2から6科目ある、原則履修科目を各学科共通2科目に削減するとしている。

現行の教育課程の下で履修している生徒達は、現状の制度をどのように受けとめているだろうか。

1. 普通科目や専門科目での講義形式の授業時間数を増やすべきか

表VII-1に示す。

島根県立の高校全体の状況(表VII-1-1)をみると、「国語、社会等の普通科目や工業基礎、工業数理、流通経済、簿記、国際経済、農業基礎、栽培、食品化学等の専門での講義形式の授業時間数をもっと増やすべきだと思いますか」について、3つの高校でほぼ同じ結果がでた。

「現状のままでよい」が約54%~59%で、「減らすべきである」とする約16%~18%の3倍以上にもなっていて、「現状のまま」を支持している。

北京市の学校全体の状況(表VII-1-2)をみると、3つの学校でもほぼ同じ結果がでた。

「語文、数学等の普通科目や機械原理・機械零件、工程力学、統計原理、経済法、基礎会計、牧畜内・外科学、植物及び植物原理、村・町規画原理と設計等の専門科目での講義形式の授業時間数をもっと増やすべきだと思いますか」について、「現状のままでよい」が約46%~53%、次いで「特に意見はない」が約19%~26%で、北京の学校でもほぼ半数が「現状のまま」を支持していることになる。

2. 専門科目での講義形式の授業時間数を減らして、実験・実習等の授業時数を増やすべきか

表VII-2に示す。

島根県立の高校全体の状況(表VII-2-1)をみると、「工業基礎、工業数理、流通経済、簿記、国際経済、農業基礎、栽培、食品化学等の専門での講義形式の授業時間数をもっと減らして、実験・実習等の授業時間数を増やすべきだと思いますか」について、3つの高校でほぼ同じ結果がでた。

「現状のままでよい」が約45%~55%、次いで「増やすべき」が約21%~29%となっている。約半数の生徒が

表Ⅶ-1 普通科目や専門科目（專業課程）での講義形式の授業時間数をもっと増やすべきだと思いますか。

- a 増やすべき
 - b 現状のままでよい
 - c 減らすべき
 - d 特に意見はない
 - e その他（ ）
- に対する回答の結果

表Ⅶ-1-1 島根県立の3高校

項目	a	b	c	d	e	計
工業高校 人数(%)	12 (7.6)	85 (53.8)	28 (17.7)	28 (17.7)	5 (3.2)	158 (100)
商業高校 人数(%)	17 (7.4)	137 (59.3)	37 (16.0)	40 (17.3)	0 (0)	231 (100)
農林高校 人数(%)	8 (8.9)	52 (57.8)	15 (16.7)	15 (16.7)	0 (0)	90 (100)
3高校の合計 人数(%)	37 (7.7)	274 (57.2)	80 (16.7)	83 (17.3)	5 (1.1)	479 (100)

表Ⅶ-1-2 北京市の3学校

項目	a	b	c	d	e	計
機械化学校 人数(%)	8 (7.3)	58 (52.7)	10 (9.1)	28 (25.5)	6 (5.5)	110 (100)
財經学校 人数(%)	31 (21.1)	67 (45.6)	8 (5.4)	33 (22.4)	8 (5.4)	147 (100)
農業学校 人数(%)	9 (6.3)	74 (51.4)	24 (16.7)	28 (19.4)	9 (6.3)	144 (100)
3学校の合計 人数(%)	48 (12.0)	199 (49.6)	42 (10.5)	89 (22.2)	23 (5.7)	401 (100)

「現状のままでよい」を支持しているが、積極的に「増やすべき」であるとする生徒もほぼ2～3割いた。

北京市の学校全体の状況（表Ⅶ-2-2）をみると、ここでも同じ結果がでた。「機械原理・機械零件，工程力学，統計原理，経済法，基礎会計，牧畜内・外科学，植物及び植物原理，村・町計画原理と設計等の専門科目での講義形式の授業時間数をもっと減らして，実験・実習等の授業時間数を増やすべきだと思いますか」について，「現状のままでよい」が約45%～54%，ついで「特に意見はない」が約19%～26%となっている。積極的に「増やすべき」であるとする者が県立高校と比べて1～2割でやや低かった。

この結果は，「学校の実態」で述べたように，実験・実習等の授業時間数が，県立高校と比べて既に多く開講されていたことに依るものと考えられる。

表Ⅶ-2 専門科目（專業課程）での講義形式の授業時間数をもっと減らして，実験・実習等の授業時数を増やすべきだと思いますか。

- a 増やすべき
 - b 現状のままでよい
 - c 減らすべき
 - d 特に意見はない
 - e その他（ ）
- に対する回答の結果

表Ⅶ-2-1 島根県立の3高校

項目	a	b	c	d	e	計
工業高校 人数(%)	46 (29.1)	71 (44.9)	14 (8.9)	25 (15.8)	2 (1.3)	158 (100)
商業高校 人数(%)	57 (24.7)	128 (55.4)	10 (4.3)	35 (15.2)	1 (0.4)	231 (100)
農林高校 人数(%)	19 (21.1)	45 (50.0)	5 (5.6)	21 (23.3)	0 (0)	90 (100)
3高校の合計 人数(%)	122 (25.5)	244 (50.9)	29 (6.1)	81 (16.9)	3 (0.6)	479 (100)

表Ⅶ-2-2 北京市の3学校

項目	a	b	c	d	e	計
機械化学校 人数(%)	15 (13.6)	55 (50.0)	16 (14.6)	21 (19.1)	3 (2.7)	110 (100)
財經学校 人数(%)	18 (12.3)	79 (53.7)	5 (3.4)	39 (26.5)	6 (4.1)	147 (100)
農業学校 人数(%)	24 (16.7)	77 (53.5)	5 (3.5)	27 (18.8)	11 (7.6)	144 (100)
3学校の合計 人数(%)	57 (14.2)	211 (52.6)	26 (6.5)	87 (21.7)	20 (5.0)	401 (100)

4-8 今までに取得した公的職業資格，あるいは卒業までに取得できそうな資格について

島根県立の高校の状況（表Ⅷ-1～表Ⅷ-3）をみると，今までに取得した公的職業資格の種類や取得率などは，各高校・各学科によって異なっている。このことは，資格の種類によって取得の難易度に違いがあることなどが考えられる。

この公的職業資格の取得については，例えば，商業教育において，生徒一人一人の個性的な資質を見出し，困難に挑戦する意欲や創造性等を積極的に伸ばしていくことなどが重要であるとし，いろいろな試みを実施している。全国商業高等学校長協会は，生徒の普段の学習成果の発表の場として珠算，簿記，ワープロ，情報処理，英語など各種の競技大会を実施している。

こうした専門高校の活性化へ向けた一つの教育政策に対する学校側の取り組みの状況について、岩手県立宮古商業高等学校を例に、資格取得に関係する部分について簡単に紹介しておく。

それによれば、平成9年度の教育課程のねらいを次のようにしている。

(1) 各学科とも、資格取得、能力・適性に応じて商業科目間の選択ができること。

(3) どの科目も、簿記1級取得を可能にし、その他に各学科とも1級2種目に挑戦できるようにした。

検定科目の指導にあたっては、前学年の習熟程度を参考にして1クラス二分割授業を行うこと。

また、学校活性化の取り組みの一環として、上級

資格取得のための、外部講師による次のような特別研修講座を設けて、長期休業中に実施している。

(1) 日本商工会議所主催簿記1級コース
会計科2年生と希望者が受講し、3～4日の集中講義とする。

(2) 情報処理技術者試験コース
情報処理科1、2年生が受講し、日数は3～4日とする。

(3) 販売士2級コース
流通経済科2、3年を対象としているが、希望者も受講できる。

販売士3級は「課題研究」の時間で指導し、合格者を多く出しているが、2級の指導は外部講師に頼らざるを得ない。

2日間の集中講義である。

表Ⅷ 今までに取得した公的職業資格、あるいは卒業までに取得できそうな資格がありますか。

に対する回答の結果

表Ⅷ-1 島根県立の工業高校

学 科	資 格 の 種 類		
機械科76名 人数(%)	乙種危険物取扱者 33(43.4)	ガス溶接技術者 19(25.0)	二級ボイラー技師 8(10.5)
電気科58名 人数(%)	第2種電気工事士 45(77.6)	乙種危険物取扱者 9(15.5)	第3種電気主任技術者 4(6.9)
土木科29名 人数(%)	デジタル技術検定 16(55.2)	乙種危険物取扱者 4(13.8)	測量士補 3(10.3)

表Ⅷ-2 島根県立の商業高校

学 科	資 格 の 種 類		
商業科179名 人数(%)	情報処理検定2、3級 167(93.3)	ワープロ検定2、3級 147(82.1)	電卓実務 137(76.5)
情報科27名 人数(%)	情報処理検定1、2、3級 23(85.2)	商業経済検定2、3級 17(63.0)	実用英語検定3級 12(44.4)
会計科25名 人数(%)	日商簿記検定2、3級 25(100)	商業経済検定3級 12(48.0)	全国商高校検定1級 10(40.0)

表Ⅷ-3 島根県立の農林高校

学 科	資 格 の 種 類		
農業科33名 人数(%)	乙種危険物取扱者 5(15.2)	その他(実用英語検定4級) 4(12.1)	その他(漢字検定3、4級)3(9.1)
園芸科32名 人数(%)	その他(漢字検定3級) 3(9.4)	ワープロ検定3級 1(3.1)	
農土木科27名 人数(%)	土木施工技術者試験 4(14.8)	乙種危険物取扱者 2(7.4)	その他(実用英語検定4級) 2(7.4)

以上、一つの取り組みの例を紹介したが、他の多くの学校において、多様な実践例をみることができた。

検定・資格取得状況を、日本の場合の農業に関する学科在籍生徒を例にしたものを表Ⅷ-4に示す。

北京市の中等専門学校では、ある専業を卒業すれば、学校が認定している資格は与えられる。

従って、在学中の生徒は特定の統一資格試験を受けないので、この項目は調査から除外した。

4-9 卒業後、大学あるいは専修学校などへの進学を希望しているか

表Ⅸ-1によると、卒業後、大学への進学を希望している生徒の比率は、商業高校で約19%、工業高校で約14%、農林高校で約9%などとなっている。また卒業後、専修学校への進学を希望している生徒の比率は、農林高校で約33%、工業高校で約21%、商業高校で約17%などとなっている。卒業後に、大学あるいは専修学校などへの進学を希望している生徒が各高校で、それぞれ全体の約35%~40%になっている。

尚、北京市の中等専門学校においては、卒業者が一部(3%~8%)の例外な生徒を除いて、直接大学に進学できないので(卒業後、2年以上の就業後には可能)、この項目については調査から除外した。

日本においては、高校から大学・短期大学等への進学率は、年々増加の傾向にある。

一つの資料によれば、平成9年度の大学・短大への進学率は約47%、大学・短大・高等専門学校(4年次)・専修学校(専門課程)への進学率は約67%であった。

表Ⅷ-4 農業に関する学科在籍生徒の資格取得の状況（指導主事会資料から作成：平成9年3月卒業、国立・私立高校は除く）

資格名	毒劇物取扱	危険物取扱	ボイラー 技士	大特自動車	園芸装飾	測量士	測量士補	運転士	公害防止	冷凍機械
取得数	754	5,844	257	344	36	20	658	630	1	0
資格名	販売士検定	ワープロ 技士	土木施工 技術	車両建設 機械	浄化槽 管理士	造園施工 技術	造園技能士	造園技術 検定	自動車整備	簿記検定
取得数	107	94	491	747	14	218	180	407	13	1,231

注記 上掲の表は、文部省職業教育課編「産業教育」第47巻、第10号より引用

表Ⅸ-1 卒業後、大学あるいは専修学校などへの進学を希望していますか。

に対する回答の結果

県立3高校の生徒の進学希望状況

進学機関	学校 生徒数	工業高校 163名	商業高校 231名	農林高校 92名
大学への進学 人数(%)		22 (13.5)	43 (18.6)	8 (8.7)
専修学校への進学 人数(%)		34 (20.9)	39 (16.9)	30 (32.6)

近年における技術革新の進展や産業構造・就業構造の変化に伴い、職業人として生涯にわたって高度の専門的な知識・技能を有することが求められている。それに対応するためには、専門高校卒業後も継続した専門能力の向上をめざした教育が重要となる。

一方の大学側でも、工学・商学・農学などに関する大学・学部をはじめ、教員養成大学・学部においても、専門高校や総合学科の卒業生を対象に、一般の受験生とは別枠で選抜する特別選抜や推薦入学制度の導入が拡大することなどで、今後一層、専門高校からの高等教育機関への進学率が高まることが予想される。

その後の上級学校での専門性と専門高校で修得した基

礎・基本をどのように整合させ、応用・発展させていくのかなど、将来の職業人としての進路とも関わって、専門高校での進路指導の充実が求められる。

日本の場合の農業に関する学科の卒業生の進学状況を例にしたものを表Ⅸ-2に示す。

4-10 学科で学んだ専門分野と就職を希望している企業との関連及び就職先は県内か県外か

表Ⅹ-1をみると、学科で学んだ専門と関連がある分野の企業に就職を希望している生徒は、工業高校で約59%、商業高校で約44%、農林高校で約26%となっていて、工業高校が最も高くなっている。学科で学んだ専門にはあまり関連のない分野の企業、あるいは関連にこだわらないとしている生徒は、農林高校に多い。

就職先を県内あるいは県外に求めるか、についての島根県立の高校における回答結果を表Ⅹ-2～表Ⅹ-3に示した。

学科で学んだ専門と関連があるなしにかかわらず県内志向が高いことを示している。特に農林高校はそれぞれの比率が72%と約67%で、他の2校に比べて高い。

学科で学んだ専門に関連する産業・企業が県内に多くあるか否かが、生徒の就職希望先を県内、県外に求める判断要因の一つになるだろうが、県内の農林業関係の産業振興に大きな期待が寄せられている。

表Ⅸ-2 農業に関する学科の卒業生進学状況（指導主事会資料から作成：平成9年3月卒業、国立・私立高校は除く）

卒業生数	四年制大学進学者数			短期大学進学者数			農業大学校 進学者数	専修・各 種学校進 学者数	四年制大 学進学率	大 学 進学率
	計	国公立大学	私立大学	計	国公立短大	私立短大				
40,672	1,267	291	976	1,745	132	1,613	1,476	7,804	3.1%	7.2%

注記 上掲の表は、文部省職業教育課編「産業教育」第47巻、第10号より引用

表 X-1 学科で学んだ専門分野と関連のある企業に就職を希望していますか。それとも専門分野にはあまり関連のない企業に就職を希望していますか。
に対する回答の結果

県立3高校の生徒の就職先（専門との関連）の希望状況

学校 生徒数	工業高校 163名	商業高校 231名	農林高校 92名
専門と関連がある企業 人数(%)	96 (59)	102 (44)	24 (26)
専門と関連がない企業 人数(%)	34 (21)	78 (34)	38 (41)
関連にこだわらない 人数(%)	25 (15)	42 (18)	22 (24)
無回答 人数(%)	8 (5)	9 (4)	8 (9)

表 X-2 学科で学んだ専門分野と関連のある企業に就職を希望している場合、それは県内あるいは県外の企業を希望していますか。
に対する回答の結果

県立3高校の生徒の就職先（県内・県外）の希望状況

学校	工業高校	商業高校	農林高校
県内の企業 人数(%)	61 (51)	109 (57)	46 (72)
県外の企業 人数(%)	38 (32)	44 (23)	38 (14)
県内、外にこだわらない 人数(%)	21 (17)	37 (20)	22 (14)

表中の無回答者の数には、卒業後に大学あるいは専修学校などへの進学を希望している生徒が含まれている。

尚、北京市の中等専門学校においては、大学へ進学する一部（3%～8%）の生徒を除いて、大部分が北京市及びその周辺で就職しているので、この項目については調査から除外した。

日本の場合の、平成10年3月高等学校卒業者の学科別の就職状況を表X-4に、また、農業に関する学科の卒業生就職状況を表X-5に示す。

表X-5をみると、専門に関連した産業への就職率は、

表 X-5 農業に関する学科の卒業生就職状況（指導主事会資料から作成：平成9年3月卒業、国立・私立高校は除く）

卒業生数	農業に関連した産業への就職者数							非関連 産業就職 者数	就職者 総数	就職率	関連産業 就職率
	計	食品製造	食品流通	造園・土木	農協等	公務員	その他				
40,672	8,298	2,369	1,103	2,446	441	559	1,358	17,264	25,579	62.9%	32.4%

注記 上掲の表は、文部省職業教育課編「産業教育」第47巻、第10号より引用

表 X-3 学科で学んだ専門分野とあまり関連のない企業に就職を希望している場合、それは県内あるいは県外の企業を希望していますか。
に対する回答の結果

県立3高校の生徒の就職先（県内・県外）の希望状況

学校	工業高校	商業高校	農林高校
県内の企業 人数(%)	29 (39)	84 (51)	38 (67)
県外の企業 人数(%)	26 (35)	50 (31)	11 (19)
県内、外にこだわらない 人数(%)	20 (26)	30 (18)	8 (14)

表 X-4 平成10年3月高等学校卒業者の学科別の就職状況抜粋

公立の高等学校 平成10年3月31日現在

学科名		卒業者 (A) (人)	就職希望者 (B) (人)	就職希望率 (B/A) (%)	就職者数 (C) (人)	就職率 (D=C/B) (%)
普通	男子	348,253	48,393	13.9	43,874	90.7
	女子	370,393	53,249	14.4	47,264	88.8
専 門 学 科	農業 男子	25,584	16,582	64.8	15,733	94.9
	農業 女子	13,840	8,809	63.6	8,056	91.5
工 業	男子	90,423	61,670	68.2	59,899	97.1
	女子	9,181	5,283	57.5	5,031	95.2
商 業	男子	30,618	15,163	49.5	14,420	95.1
	女子	67,953	40,004	58.9	38,051	95.1

注記 上掲の表は、文部省職業教育課編「産業教育」第48巻、第6号から作成

32.4%となっていて、必ずしも高いとはいえない。

先にみたように、学科で学んだ専門と関連がある分野の企業に就職を希望している生徒は、農林高校で約26%であった。この数値は全国的な状況をよく反映したものであるともいえよう。

若者の定住促進を図る上からも、県の産業振興・経済発展のためにも、就職を希望している新しい職業人を一人でも多く受け入れるための、早急な産業基盤の整備・発展が望まれる。

おわりに

日本及び中国の職業教育の現状について、比較研究する目的で、島根県立の専門高校と北京市の職業学校における教育課程等を中心にした実態調査を行なった。また同時に、各学校に設置されている類似した専門学科に在籍する第3学年の生徒を対象にして、進学した学校・学科を選んだ動機、現行の教育課程の下での学習意識及び卒業後の進路希望など、広範囲にわたる内容についてアンケート調査を試みた。

結果の分析を通して日本と中国の教育制度・教育政策について、本研究に関わった部分のいくつかを検討課題として取り扱うことができた。

本研究で取り上げたテーマでは、内容的には広範に、量的には過多になったことは否めない。結果として、データの分析に終始し、深く考察を加えることが充分にできなかった感がしないではない。

しかし日本では、教育課程審議会、理科教育及び産業教育審議会の二つの審議会が、平成15年度からの「新教育課程の基準」を示したところである。

今後、「新学習指導要領」の制定に向けた取り組みが行なわれる。

本研究が、今後の職業教育の充実・改善のための資料として、少しでも役に立つことを期待するものである。

最後になりましたが、本研究のための調査に、積極的にご協力いただいた島根県立の高等学校及び北京市の学校の生徒の皆さん、校長先生並びに調査の実施に携わって頂いた先生方に対して、深く感謝いたします。

また、コンピュータによるデータ処理に関して、種々のご協力を頂いた、本学部の塚本正秋教授に厚く御礼申しあげます。

引用・参考文献及び資料

1. 島根県立の各高等学校の平成8年度学校要覧及び平成9年度入学案内
2. 北京市農業機械化学校, 北京市財經学校, 北京市農業学校の1986年度学校要覧
3. 文部省編 平成7年度 我が国の文教政策 大蔵省印刷局 (1996)
4. 文部省編 平成9年度 我が国の文教政策 大蔵省印刷局 (1997)
5. 日本統計協会編 統計でみる日本 1997/98 (財)日本統計協会 (1997)
6. 文部広報 第994号 文部省大臣官房 (1998)

7. 文部広報 第996号 文部省大臣官房 (1998)
8. 文部省職業教育課編 産業教育 第47巻 第9号 海文堂出版 (1997)
9. 文部省職業教育課編 産業教育 第47巻 第10号 海文堂出版 (1997)
10. 文部省職業教育課編 産業教育 第48巻 第2号 海文堂出版 (1998)
11. 文部省大臣官房調査統計企画課 教育指標の国際比較 平成四年版 (1992)
12. 中国研究所編 中国年鑑 1996年版 新評論 (1996)
13. 武吉次郎, 中野謙二編 現代中国30章 大修館書店 (1994)